

大学における公共獣医事教育推進委託事業

分野1 公衆衛生行政等における全国の実習システムの構築

平成 27 年度事業報告

東京大学大学院 農学生命科学研究科

目次

1. 事業の概要	P. 3
1) 事業の目的	
2) 事業の内容	
3) 実施体制	
2. 実績報告	P. 7
1) 実習システムの構築	
(1) プログラムの開発	
(2) 事前講義の開発	
(3) ホームページの改善	
(4) 広報活動	
2) 実習の実施	
3) 実習の事後評価	
4) 実習参加学生の進路調査	
3. 関連会議	P. 41
1) 第1回コーディネータ会議	
2) 第2回コーディネータ会議	
3) シンポジウムの開催	
4) 第103回全国獣医系大学関係代表者協議会への報告	
5) 第104回全国獣医系大学関係代表者協議会への報告	
6) 獣医公衆衛生研究への寄稿	
4. 今後の課題	P. 50
1) 受入機関の拡充の必要性	
2) 実習システムの更なる改善の必要性	
3) 学生の認知度工場の必要性	
4) 学生の進路追跡調査の必要性	
5) サステナビリティの必要性	
参考資料 VPcamp 手引き 受入機関用	P. 53

1. 事業概要

1) 事業の目的 (平成 27 年度業務計画書から抜粋)

社会のグローバル化の進展に伴い、国境を超える人の交流や物資の取引が進展するにつれ、国境を超える家畜伝染病、人獣共通感染症等の進入リスクが高まり、これらの感染症の防疫を担う獣医師を養成するための獣医学教育の強化はますます重要な課題となっている。特に 21 世紀に入り、国内における口蹄疫、鳥インフルエンザ、牛海綿状脳症 (BSE) などの発生を背景に、現場の最前線で感染症の蔓延防止対策や進入防止対策に従事する公務員獣医師に対する社会的ニーズが高まっている。

このようなニーズに応えるため、国および地方公共団体などが実施する公共獣医事のうち公衆衛生分野を担う検疫所、全国の都道府県の保健所、と畜場、食鳥処理場、動物愛護センター、衛生研究所などの協力を得て、現場における公衆衛生分野の実務経験の幅広い獲得を柱とした実践的な実習システムを構築する。これにより、公共獣医事を担う獣医師の養成に資する。

2) 事業の内容 (獣医公衆衛生研究寄稿論文から抜粋)

公衆衛生に携わる知識・技術を獲得するため、公共獣医事を担う保健所、と畜場、食鳥処理場、動物愛護センター、衛生研究所などにおいて食品安全・感染症防疫・動物福祉の分野の体系的な実務経験ができるような内容の実習プログラムの開発を、全国の自治体および機関協力の下行う。実習協力自治体や機関の開拓、実習内容の策定、実習の手引きの作成、実習機関等の情報提供など、全国の獣医学生が広く利用できるような体制の整備を図る。

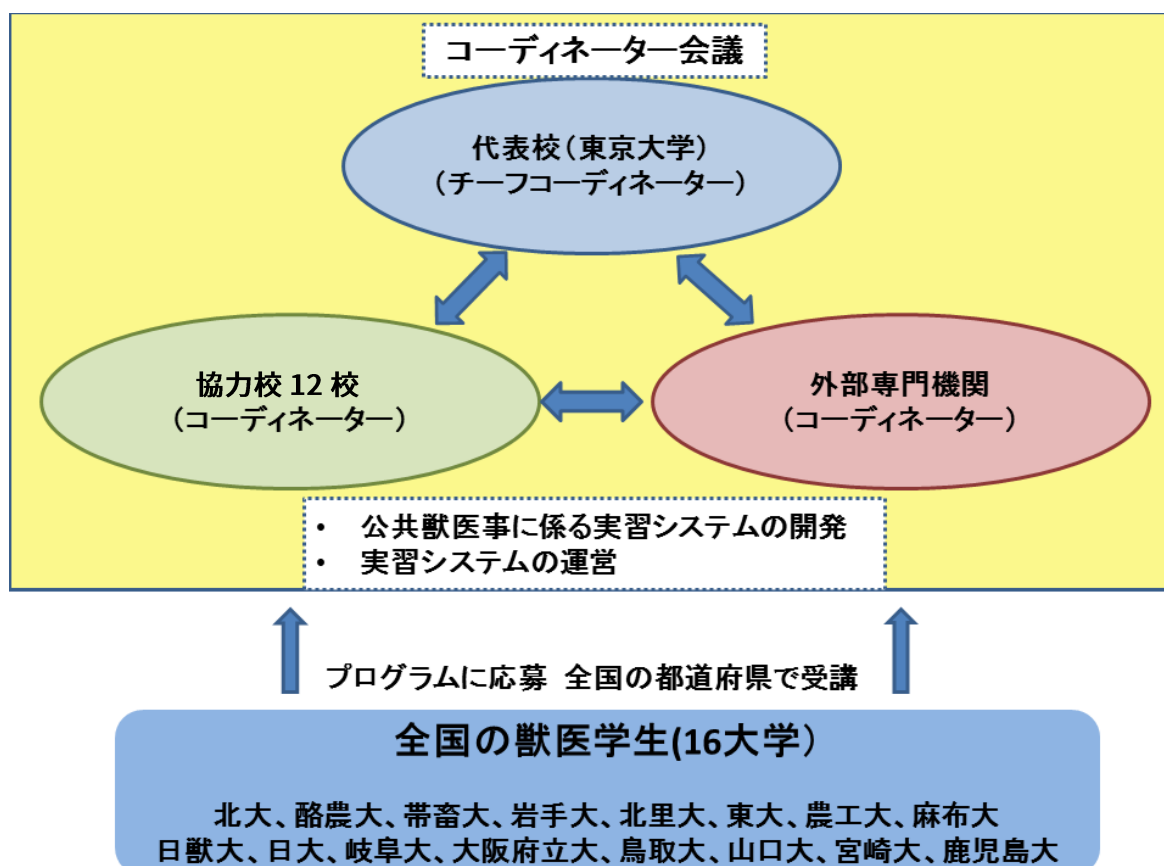
実習プログラムは高度で実践的なものを提供する観点から、実習内容は単に見学や講義にとどまらず、ラボワーク又はフィールドワークを含めたものとしている。

3) 実施体制

平成 27 年度には新たに 4 校（北海道大学、帯広畜産大学、北里大学、日本大学）が加わり計 12 校が協力校となった。

担当	大学など
代表校	東京大学
協力校	獣医系 12 校（北海道大学、帯広畜産大学、岩手大学、東京農工大学、岐阜大学、大阪府立大学、鳥取大学、山口大学、宮崎大学、鹿児島大学、日本大学、北里大学）
外部専門機関	全国公衆衛生獣医師協議会会長（東京都福祉保険局健康安全部 食品危機管理担当課長）

■実施体制



■表1 メンバーリスト

担当	氏名	所属	事務局
チーフコーディネータ	杉浦勝明	東京大学大学院 農学国際専攻	○
コーディネータ	刈和宏明	北海道大学 獣医学部	
コーディネータ	廣井豊子	帯広畜産大学 獣医学科	
コーディネータ	佐藤繁	岩手大学 共同獣医学科	
コーディネータ	村上賢二	岩手大学 共同獣医学科	
コーディネータ	鎌田洋一	岩手大学 共同獣医学科	
コーディネータ	尾崎博	東京大学大学院 獣医学専攻	
コーディネータ	望月学	東京大学大学院 獣医学専攻	
コーディネータ	綱嶋るみ	東京大学大学院 農学国際専攻	○
コーディネータ	堀正敏	東京大学 獣医学専攻	
コーディネータ	芳賀猛	東京大学 獣医学専攻	
コーディネータ	山田章雄	東京大学 獣医学専攻	
コーディネータ	白井淳資	東京農工大学/附属国際家畜感染症防疫研究教育センター	
コーディネータ	藤川浩	東京農工大学 共同獣医学科	
コーディネータ	竹原一明	東京農工大学 共同獣医学科	
コーディネータ	北川均	岐阜大学 共同獣医学科	
コーディネータ	笹井和美	大阪府立大学大学院 獣医学専攻	
コーディネータ	伊藤壽啓	鳥取大学 共同獣医学科	
コーディネータ	豊福肇	山口大学 共同獣医学科	
コーディネータ	中馬猛久	鹿児島大学 共同獣医学部	
コーディネータ	後藤義孝	宮崎大学 獣医学科	
コーディネータ	上野俊治	北里大学 獣医学部	
コーディネータ	壁谷英則	日本大学 生物資源科学部獣医学科	
外部専門機関	中村重信	全国公衆衛生獣医師協議会会長 (東京都福祉保健局健康安全部食品危機管理担当課長)	
学術支援職員	佐藤聡子	東京大学大学院 農学生命科学研究科	○

2. 実績報告

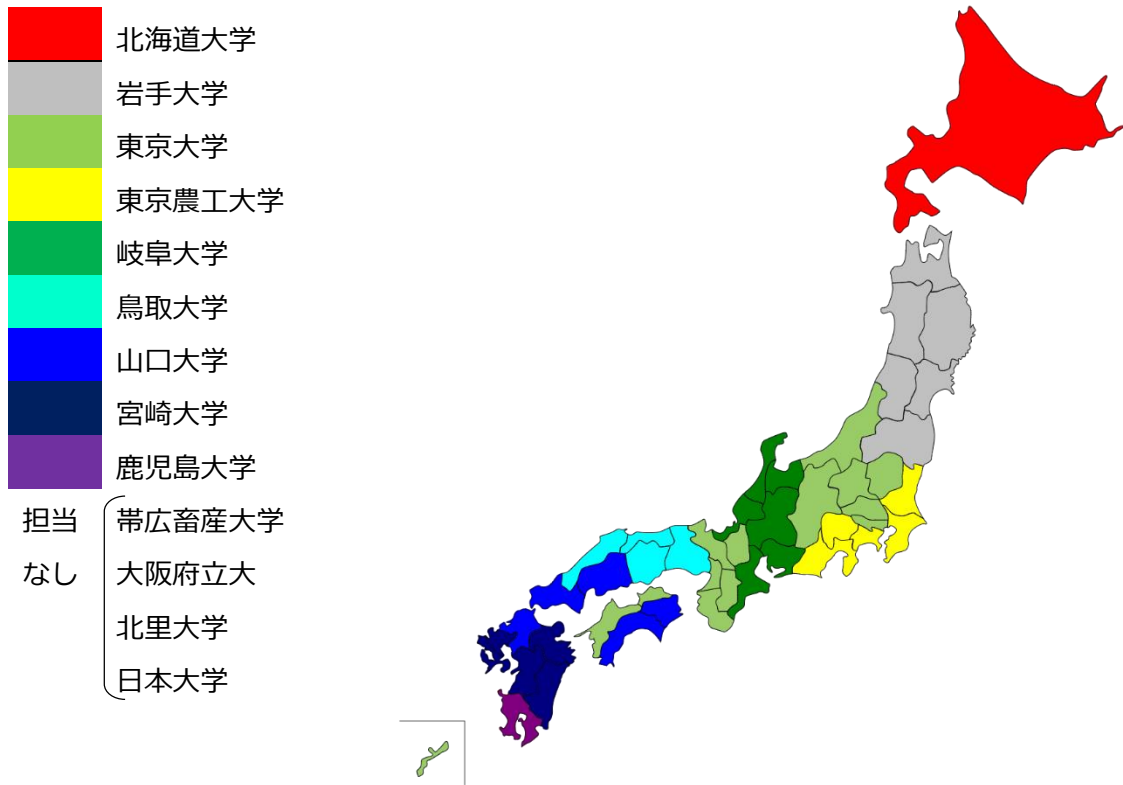
1) 実習システムの構築

(1) プログラムの開発

前年度から引き続き、大学ごとに担当する都道府県を割り当て、実習受入機関の開拓を行った。プログラムの開発に際しては「実習実施期間の手引き」(参考資料 P. 53～)を作成し、これを用いて全国自治体及び国の機関に協力を依頼した。その結果平成 27 年度は、夏期で 19 府県・5 都市・8 国の機関、春期は 10 道府県・2 都市、合わせて 23 道府県・7 都市・8 国の機関で実習を行った。

■表2 各コーディネータの担当都道府県 (表7は P.35-36 に記載)

コーディネータ	担当都道府県
北海道大学	北海道及び表7の政令指定都市・中核都市・特例市の自治体
帯広畜産大学	担当なし
岩手大学	青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島各県及び表7の政令指定都市・中核都市・特例市の自治体
東京大学	栃木、群馬、埼玉、東京、新潟、長野、滋賀、京都、大阪、奈良、和歌山、香川、愛媛、沖縄各都県及び表7の政令指定都市・中核都市・特例市の自治体ならびに国などの機関
東京農工大学	茨城、千葉、神奈川、山梨、静岡の県及び表7の政令指定都市・中核都市・特例市の自治体
岐阜大学	富山、石川、福井、岐阜、愛知、三重の各県及び表7の政令指定都市・中核都市・特例市の自治体
鳥取大学	鳥取、岡山、兵庫、島根の各県及び表7の政令指定都市・中核都市・特例市の自治体
山口大学	広島、山口、徳島、福岡、高知の各県及び表7の政令指定都市・中核都市・特例市の自治体
宮崎大学	佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎の各県及び表7の政令指定都市・中核都市・特例市の自治体
鹿児島大学	鹿児島県及び表7の政令指定都市・中核都市・特例市の自治体
大阪府立大学	担当なし
北里大学	担当なし
日本大学	担当なし

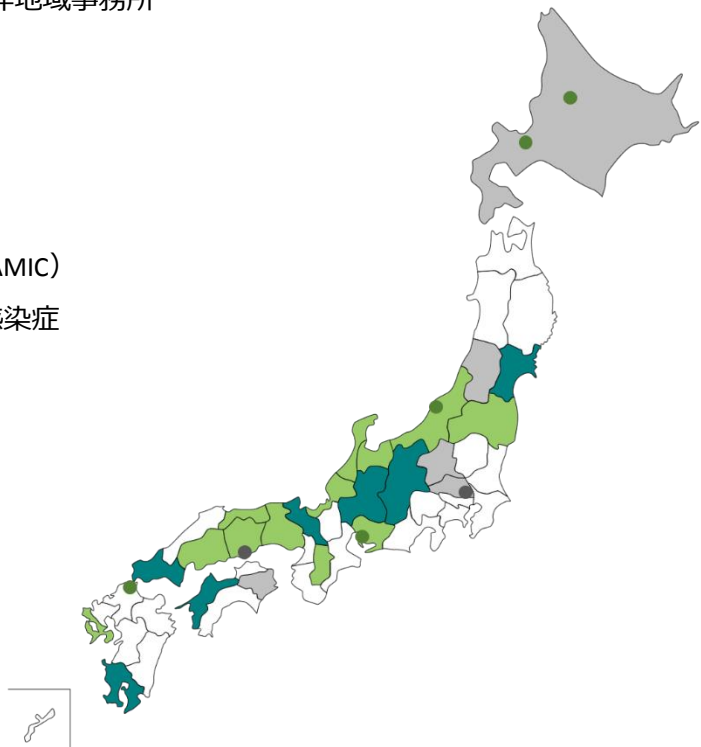


■平成 27 年度実習プログラム実施自治体

国などの機関

- ・国際獣疫事務局（OIE）アジア太平洋地域事務所
- ・動物検疫所
- ・動物衛生研究所
- ・国立感染症研究所
- ・動物医薬品検査所
- ・農林水産消費安全技術センター（FAMIC）
- ・東京農工大学農学部附属国際家畜感染症防疫研究教育センター
- ・日本中央競馬会（JRA）

	夏期実施府県
●	夏期実施都市
	春期実施道府県
●	春期実施都市
	夏期・春期実施府県



(2) 事前講義の開発

実習現場における実習効果を向上させることを目的として、学生が実習へ参加する前に視聴する「事前講義」の収録配信を行った。

前年度に収録・配信した講義に加えて、平成 27 年度は新たに 16 名の講師に講義を依頼し、22 コマの講義を収録・配信した。講義時間は 1 コマ当たり 20 分前後に設定し、学生が集中して視聴できるように配慮した。また、講義は youtube へアップロードし、パスワードを入力することで視聴可能になる形式をとった。

受入機関は、学生が実習を受ける前に視聴して欲しい講義を指定し、募集要項に参加条件として記載できる。参加する学生にパスワードを配布し、実習前に講義を視聴するよう指示した。

■表3 前年度および平成 27 年度に収録・配信した事前講義の一覧
(表中の ■・■ は今年度収録及び掲載の事前講義)

講義タイトル	講師	収録年
0.参加者必修講義		
0-1 実習を受ける際の心得	一般財団法人 日本冷凍食品検査協会 加地祥文	26
1.獣医公衆衛生行政・法規		
公衆衛生と獣医師	一般財団法人 日本冷凍食品検査協会 加地祥文	26
獣医公衆衛生行政の仕組み	一般財団法人 日本冷凍食品検査協会 加地祥文	26
公衆衛生行政のための法律 総論 I (食品衛生法、と畜場法、食鳥検査法)	一般財団法人 日本冷凍食品検査協会 加地祥文	26
公衆衛生行政のための法律 総論 II (感染症法)	一般財団法人 日本冷凍食品検査協会 加地祥文	26
日本の食品安全行政のしくみ	内閣府 食品安全委員会 小財恵	26
食品安全のリスク評価について	内閣府 食品安全委員会 松下西	26
保健所・食肉衛生検査所の業務内容	一般財団法人 日本冷凍食品検査協会 加地祥文	26
食品衛生監視員の役割	東京家政大学 森田幸雄	26
と畜検査員の役割およびと畜処理	東京家政大学 森田幸雄	26
と畜場で全部廃棄・部分廃棄になる疾病	東京家政大学 森田幸雄	26
動物愛護管理行政について	環境省 今西保	26
「食鳥検査」について	宮崎県福祉保健部衛生管理課下村高司	27
食鳥処理場における衛生管理 (HACCPを含む)	宮崎県福祉保健部衛生管理課下村高司	27
狂犬病予防業務 動物愛護管理業務について	東京都動物愛護相談センター 新井 英人	27
2.家畜衛生行政・法規		
家畜衛生行政 国内防疫 I	農林水産省 伏見啓二	26
家畜衛生行政 国内防疫 II	農林水産省 伏見啓二	26
家畜衛生行政 動物検疫 (輸出入検疫)	農林水産省 伏見啓二	26
動物薬事行政 I	麻布大学 平山紀夫	27
動物薬事行政 II	麻布大学 平山紀夫	27
家畜保健衛生所の役割	愛知県 家畜保健衛生所 神谷俊樹	27
家畜防疫員の責務	愛知県 家畜保健衛生所 神谷俊樹	27
動物検疫所について	農林水産省 伏見啓二	27
動物検疫所の獣医師の責務	農林水産省 伏見啓二	27
3.食品安全		
と畜場で防いでいる人獣共通感染症について	東京家政大学 森田幸雄	26
と畜場HACCPについて	東京家政大学教授 森田幸雄	26
食肉の対米・対EU輸出	東京家政大学教授 森田幸雄	26
農場HACCPの概要	那須イーティ研究所 西貝正彦	27
農場HACCP認証審査について	那須イーティ研究所 西貝正彦	27
食品由来感染症の概要	国立医薬品食品衛生研究所 五十君静信	27

4.感染症防疫		
人獣共通感染症と新しい獣医師の役割 I	千葉科学大学 吉川泰弘	26
人獣共通感染症と新しい獣医師の役割 II	千葉科学大学 吉川泰弘	26
アルボウイルス感染症	国立感染症研究所 高崎智彦	27
家畜に分布する薬剤耐性菌の現状と対策	岐阜大学 浅井鉄夫	27
5.動物福祉		
小動物診療分野で期待する職業倫理 I	獣医療問題研究会 山村穂積	26
小動物診療分野で期待する職業倫理 II	獣医療問題研究会 山村穂積	26
災害時動物マネジメント (資料のみ)	新潟県動物愛護センター 遠山 潤	(27)
6.畜産資材		
動物用ワクチンについて	麻布大学 平山紀夫	26
ペットの食の安全確保 ペットフードの種類と市場	獣医療法食評価センター 藤井立哉	26
ペットの食の安全確保 ペットフードの製造と品質管理	獣医療法食評価センター 藤井立哉	26
7.獣疫学		
はじめに	東京大学 杉浦勝明	27
牛白血病の疫学調査	動物衛生研究所 小林創太	27
生産現場のデータを用いた疫学研究	酪農学園大学 中田健	27
動物感染症とシミュレーションモデル	動物衛生研究所 山本健久	27
ペット保険データを用いた疫学研究	アニコム損害保険株式会社 井上舞	27
8.馬の臨床学		
馬の臨床学総論	日本中央競馬会(JRA) 競走馬総合研究所 上野儀治	25
馬の構造特性	日本中央競馬会(JRA) 競走馬総合研究所 桑野睦敏	25
馬の臨床学総論と競馬におけるドーピング	日本中央競馬会(JRA) 競走馬総合研究所 上野儀治	25
馬の運動器疾患	日本中央競馬会(JRA) 競走馬総合研究所 笠嶋快周	25
馬の循環器・呼吸器疾患	日本中央競馬会(JRA) 競走馬総合研究所 大村 一	25
馬の消化器・眼科疾患	日本中央競馬会(JRA) 競走馬総合研究所 和田信也	25
臨床繁殖学・産科学	日本中央競馬会(JRA) 日高育成牧場 南保泰雄	25
馬感染症総論	日本中央競馬会(JRA) 競走馬総合研究所 奥河寿臣	25
9.その他		
家畜改良増殖目標について	農林水産省 菊池淳志	27
酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針について	農林水産省 鈴木恭人	27
アフリカ豚コレラ～養豚産業への世界的脅威～	サンチェス・ヴィスカイノ教授	27
The training of official veterinarians in France. I	Professor Marc ARTOIS	26
The training of official veterinarians in France. II	Professor Marc ARTOIS	26

(3) ホームページの改善

前年度に再構築したホームページを使用しつつ、メニュー表示の操作性を簡便にした(グローバルメニュー表示の導入)。実習先の検索方法を実習内容や場所から検索できるようにした他、過去の実習実施自治体の検索、参加学生のための手引書(VPcamp Book)のダウンロード、学生日誌フォーマットのダウンロード、受入れ機関向け手引書のダウンロード、本事業の実績などの表示をわかり易く配置した。

また、学生および実習実施自治体に行う実習後のアンケートを、ホームページ上で記入・送信できるように改変した。

自治体の実習後に行う学生の個別評価について、夏期実習ではホームページ上での記入・送信の形態であったが、実習参加学生の多い自治体から記入の煩雑さの声があったことから、春期実習からは学生の個別評価フォーマットをホームページからダウンロードし、フォーマットに記入後事務局へ送付する形態へ改善した。

■ホームページのトップページ



■グローバルメニュー表示の導入

(メニューバーにポイントを合わせると、各々の項目を見ることができる)



(4) 広報活動

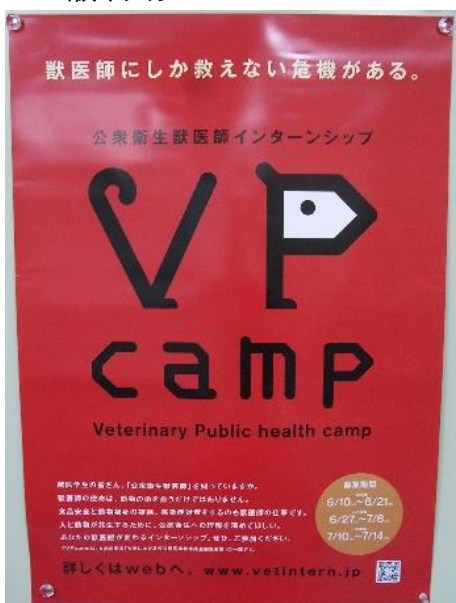
昨年度に作成した「獣医学生のための実習インターンシッププログラム」の愛称「VPCamp」を使用し、学生および全国自治体及び機関への周知を行った。

A1 版ポスターを作成して夏期実習の募集開始前に全国獣医系 16 大学へ配布し、掲示を依頼した。また、A4 版見開きのチラシを作成し、学生と自治体へ配布した。春期実習の募集開始前には、実習への応募から参加までの流れと平成 28 年度のカレンダーが記載されている B7 版 VPcamp Book（参加学生のための手引書）を作成し、全国獣医系 16 大学の 1～5 年生に配布。さらに平成 28 年度のカレンダーが記載されている A4 版クリアファイルを全国獣医系 16 大学の 1～5 年生に配布し、次年度の実習に向けた情報の周知を行った。

■表 4 広報活動の年間スケジュール

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
VPcamp スケジュール			募 集	募 集	実 施	実 施				募 集	実 施	実 施
製作物の実績		A1 版 ポスター					A4 版 チラシ		VPcamp Book	VPcamp Book	クリア ファイル	
上記製作物の 配布対象		16 大学							3～5 年生	1～2 年生	1～5 年生	

■A1 版ポスター



平成 27 年 5 月
100 部印刷
16 大学で掲示

- ・ 都道府県保健所 46
- ・ 政令指定都市 18
- ・ 都道府県畜産課 47
- ・ (獣医系大学 16)

■ A4 版見開きのチラシ



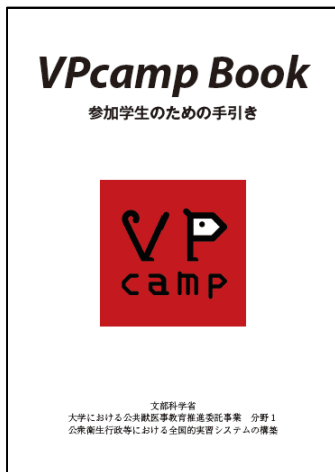
平成 27 年 10 月

4000 部印刷

全国自治体及び学生へ配布

■ B7 版 VPcamp Book

(参加学生のための手引き)

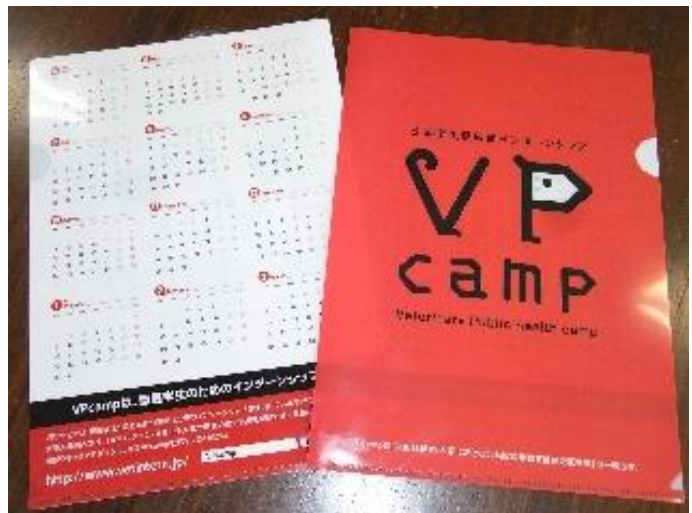


平成 27 年 12 月および平成 28 年 1 月

計 6000 部印刷

16 大学 1~5 年生へ配布

■ A4 版クリアファイル

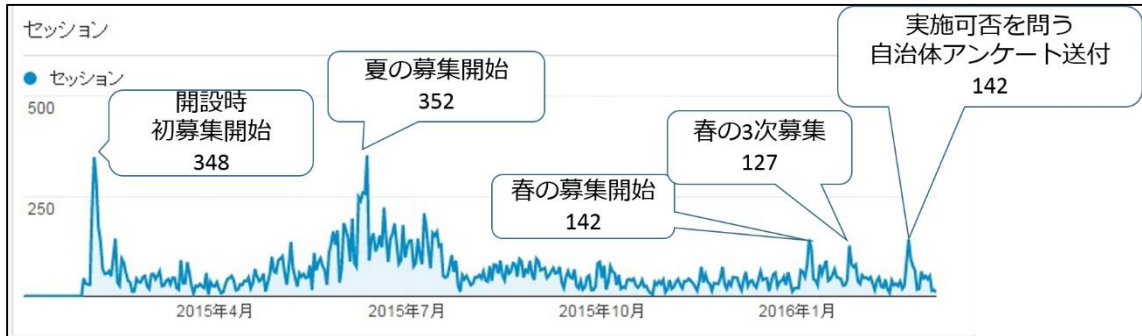


平成 28 年 2 月 6000 部作成

16 大学 1~5 年生へ配布

また、本事業ホームページへのアクセス数を Google Analytics を用いて解析したところ、実習の募集開始に合わせてホームページへのアクセス数が高くなった。

■ホームページへのアクセス数推移

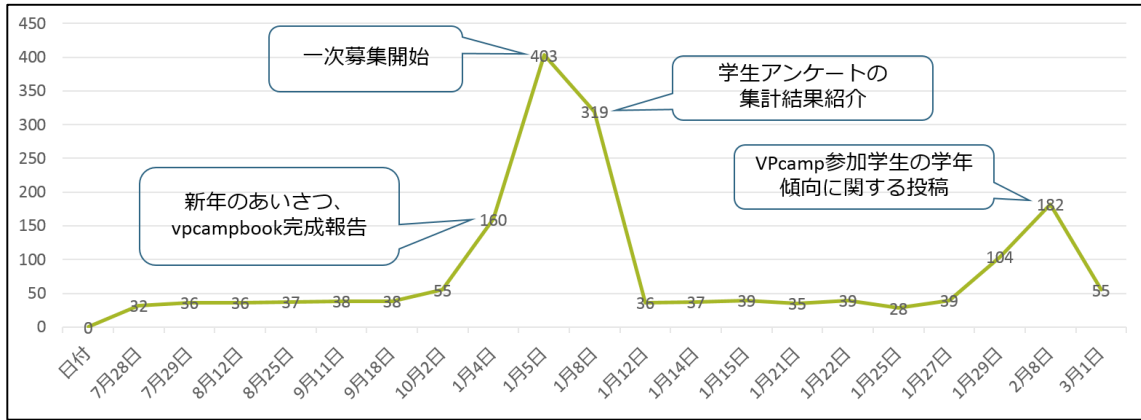


SNS を使用する頻度の高い世代である学生に対する情報の拡散を目的として、Facebook のページを開設した。その結果、常に一定の閲覧数があり、ページに記事が投稿されることで閲覧数も上がった。

■VPcamp の Facebook ページ

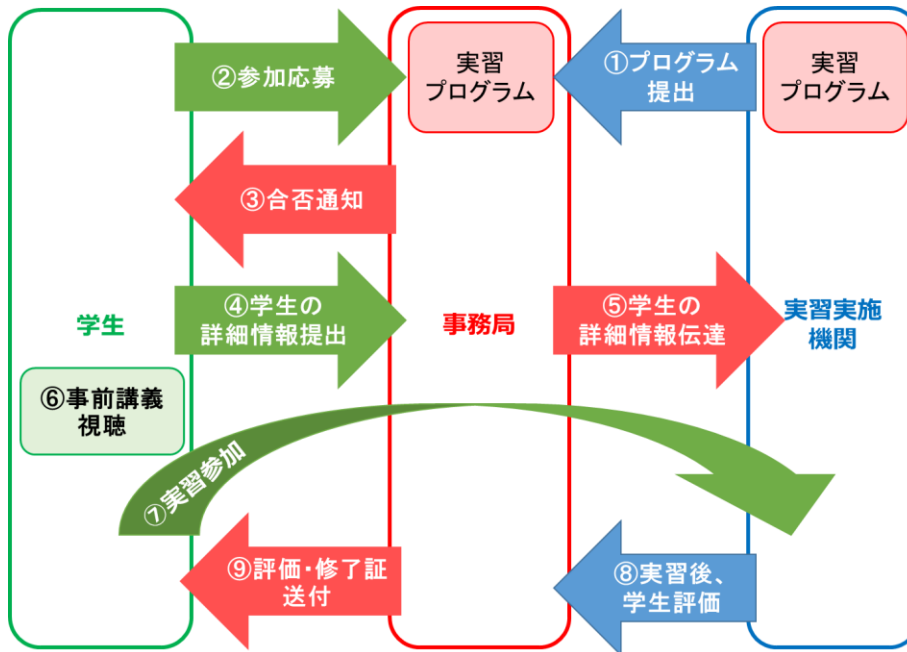


■ VPcamp の Facebook ページへの閲覧数



2) 実習の実施

自治体・機関からの実習プログラム提出から学生の応募、実習終了まで、以下の流れで行った。



平成 27 年度夏期には、19 府県、5 都市および 8 つの国などの機関の、合計 32 機関が受け入れ期間となり、6 月中旬から 7 月中旬まで募集を行い(1 次募集 6 月 10 日～21 日、2 次募集 6 月 27 日～7 月 6 日、3 次募集 7 月 10 日～15 日)、最終的には 8 月上旬から 9 月上旬までに 13 府県、3 都市および 8 つの国などの機関で実習プログラムを実施した。各実習プログラムの実施機関、実施期間、募集人数、応募人数、参加人数は表 5 の通りである。

府県主催の実習プログラムは、主に本庁、保健所、食肉衛生検査所・と畜場、食鳥処理場、動物愛護センターで実施されたが、一部の府県では家畜保健衛生所、畜産試験場でも実施された。都市主催の実習プログラムでは、実習先はほぼ同様であったが、一部の都市（札幌市および旭川市）では動物園でも実習が行われた。

府県および市主催の実習プログラムについては、募集人数 101 名に対し応募者 45 名、最終的な参加学生数は 42 名と、募集に対し、必ずしも十分な応募・参加が得られなかった。一方、国などの公共機関（動物検疫所、動物衛生研究所、国立感染症研究所など）の実習プログラムについては、募集 44 名に対し応募者 68 名、最終的な参加学生数は 41 名と高い参加率であった。

■表5 平成27年度夏期実習プログラム

	自治体・機関名	期間	日数	実習施設							募集人数	応募人数	参加人数	
				本庁・保健所	衛生研究所	検査所・と畜場・食鳥処理場	動物愛護センター	家畜保健衛生所	畜産試験場	動物園				
府県														
1	福島県	9/7~9/11	5	●	●	●						2	1	0
2	新潟県①	8/22~8/26	5	●	●	●	●					1	0	0
3	新潟県②	8/31~9/4	5	●	●	●	●					2	2	2
4	富山県	8/17~9/18	5	●		●		●				10	0	0
5	石川県	8/24~8/28	5	●	●			●				2	0	0
6	福井県	8/24~8/28	5	●	●		●					2	2	2
7	長野県	8/17~8/21	5	●		●	●					4	3	3
8	岐阜県	8/17~8/21	5	●		●	●					5	1	1
9	愛知県①	8/24~8/28	5				●					2	2	2
10	愛知県②	8/31~9/4	5	●		●						2	3	2
11	愛知県③	9/7~9/11	5	●	●	●						2	3	3
12	京都府	8/17~8/21	5	●	●	●	●					2	2	2
13	兵庫県	8/17~8/21, 8/24~8/28, 9/14~9/18	5			●	●					6	5	5
14	奈良県	9/6~9/10	5	●			●					2	2	2
15	鳥取県①	8/31~9/4, 9/7~9/11	5		●	●		●				4	2	2
16	鳥取県②	8/31~9/4, 9/7~9/12	5		●	●		●	●			4	2	2
17	鳥取県③	8/31~9/4, 9/7~9/13	5		●	●		●	●			4	0	0
18	岡山県①	8/10~8/14, 8/17~8/21, 8/24~8/28, 8/31~9/4	5	●				●	●			8	2	2
19	岡山県②	8/17~8/21, 8/31~9/4	5	●				●	●			4	1	1
20	岡山県③	8/17~8/21, 8/31~9/4	5	●		●	●		●			4	2	2
21	広島県	8/31~9/4	5			●						2	0	0
22	山口県	8/31~9/4	5	●	●	●	●					1	1	0
23	愛媛県	9/11~9/15	5			●	●					2	2	2
24	佐賀県	8/24~8/28	5	●		●	●					2	1	1
25	長崎県	9/7~9/9	3			●						3	1	1
26	鹿児島県	8/17~8/21, 8/24~8/28	5	●		●	●					8	0	0
	小計											90	40	37
市														
27	札幌市	8/10~8/14	5	●	●		●			●		3	2	2
28	旭川市	8/31~9/3, 9/7~9/12	6	●		●				●		2	2	2
30	新潟市	8/25~9/4	9	●	●	●	●					2	0	0
31	豊田市	8/17~8/21	5	●	●	●	●					2	0	0
32	北九州市	8/24~8/28	5	●		●						2	1	1
	小計											11	5	5

国などの機関							
33	国際獣疫事務局 (OIE)	6/8~6/12	5	アジア地域における口蹄疫に関する課題を題材とし、国際政府間機関の役割を学ぶとともに、国際会議の開催を参加者として、また事務局の一員として体験する。	4	3	3
34	動物検疫所	8/24~9/4	10	動物検疫所成田支所で職員が実際に行っている業務や関連施設を見学し、空港における水際検疫業務を学習する。	6	14	6
35	動物衛生研究所	8/24~8/28	5	ウイルス学、細菌学を中心に動物感染症予防・防疫実習を行う。	4	14	4
36	国立感染症研究所	8/31^9/4	5	研究所施設見学および病原体を用いた実習を行う（重症熱性血小板減少症候群（SFTS）の real time PCR 実習、SFTSウイルスの抗体検出 ELISA & IFA（蛍光抗体法）実習、脳組織からの狂犬病ウイルスの蛍光抗体法による検出実習、次世代シーケンサーの解析等のデモと講義など）。	6	8	6
37	動物医薬品検査所	8/24~8/28	5	動物医薬品検査等実習（ウイルス含有量試験、動物用抗生物質医薬品及び一般医薬品の品質検査、薬剤感受性試験など）	5	8	6
38	農林水産消費安全技術センター (FAMIC)	8/25~8/26	2	FAMIC業務概要、施設見学、及び実習（飼料中の有害物質等(カビ毒、動物由来タンパク質)の分析体験など）。	4	1	1
39	東京農工大学農学部 附属国際家畜感染症防疫研究教育センター	9/16~9/18	3	ウシの下痢症を起こすウイルス・細菌・原虫20種類を一度に検出できるリアルタイムPCRの実習。	5	3	3
40	日本中央競馬会 (JRA)	8/24~8/28	5	馬臨床サマースクール（馬の解剖、跛行診断、内視鏡検査、全身麻酔、装蹄見学など）	10	17	12
小計					44	68	41
合計					145	113	83

平成 27 年春期には、11 道府県、2 都市の合計 12 機関が受け入れ期間となり、12 月下旬から 2 月上旬まで募集を行い（1 次募集 12 月 28 日～1 月 11 日、2 次募集 1 月 16 日～24、3 次募集 1 月 28 日～2 月 2 日）、最終的には 2 月下旬から 3 月中旬までに 8 道府県、2 都市で実習プログラムを実施した。各実習プログラムの実施機関、実施期間、募集人数、応募人数、参加人数は表 6 の通りである。

府県主催の実習プログラムは、主に本庁、保健所、食肉衛生検査所・と畜場、食鳥処理場、動物愛護センターで実施されたが、一部の府県では家畜保健衛生所、畜産試験場でも実施された。

春期実習プログラムについては、募集人数 34 名に対し応募者 24 名、最終的な参加学生数は 23 名だった。

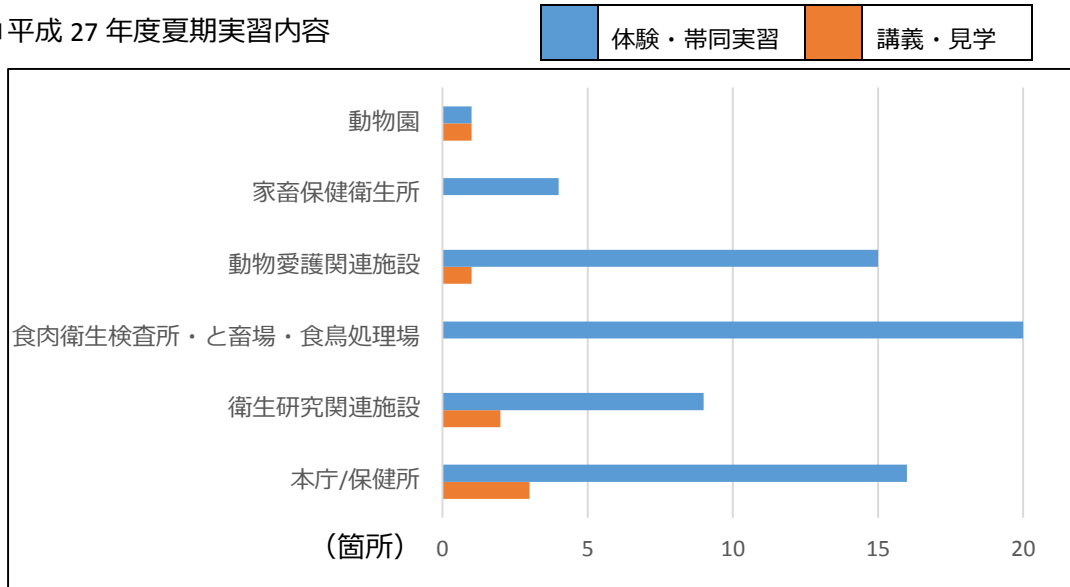
■表6 平成27年度春期実習プログラム

	自治体・機関名	期間	日数	実習施設							募集人数	応募人数	参加人数
				本庁・保健所	衛生研究所	食肉衛生検査所・と畜場・食鳥処理場	動物愛護センター	家畜保健衛生所	畜産試験場	動物園			
府県													
1	北海道	2/15~2/19	5					●			4	1	1
2	群馬県	3/7~3/11	5			●					2	0	0
3	埼玉県	2/16~2/18	3			●					2	2	2
4	長野県	2/22~2/26	5	●		●	●				4	4	4
5	岐阜県	2/29~3/4	5	●	●	●	●				3	0	0
6	京都府	3/7~3/11	5	●	●	●	●				2	5	5
7	山口県	2/22~2/26	5	●	●	●	●	●			1	1	1
8	徳島県	3/14~3/18	5	●		●	●	●			3	1	1
9	愛媛県	3/11~3/15	5			●	●				2	2	2
10	鹿児島県	2/29~3/4	5	●		●	●				6	1	1
	小計										29	17	17
市													
11	越谷市	3/14~3/18	5	●		●	●				3	5	4
12	倉敷市	2/29~3/4	5	●			●				2	2	2
	小計										5	7	6
	合計										34	24	23

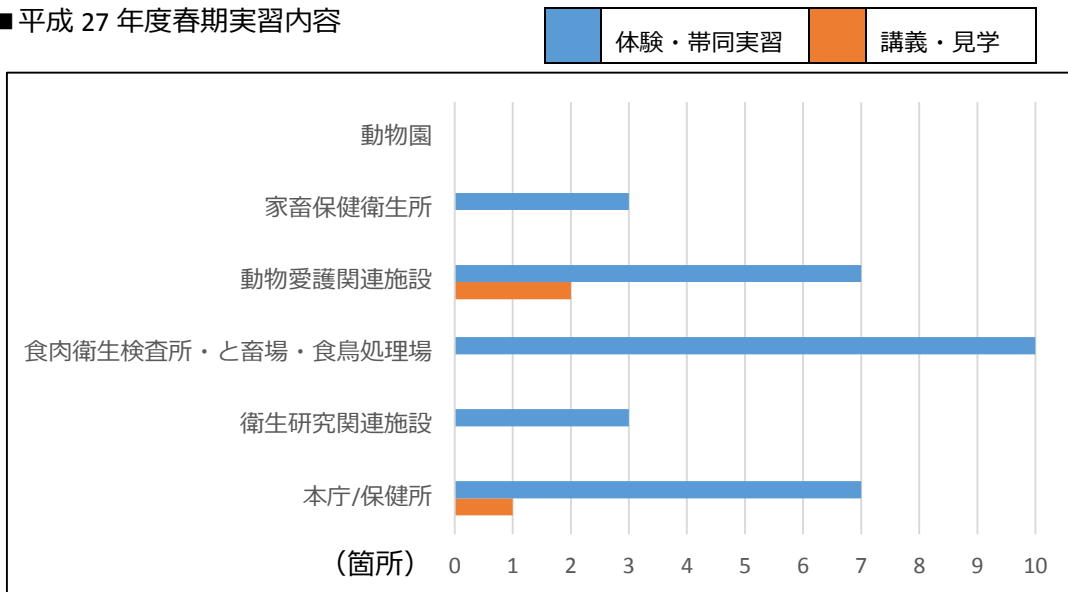
平成27年度夏期および春期実習の内容は、以下のグラフが示す通り、学生が実際に手を動かして作業・ラボワークを行う体験実習や職員の隣に付いて業務を行う帯同実習が主体となっており、講義や見学の実習は少ない。

具体的な実習内容の例として、家畜保健衛生所ではBSEや細菌・ウイルスの検査、動物愛護施設では保護されている動物の世話や譲渡会への参加、食肉衛生検査所ではと畜検査、衛生研究関連施設では微生物検査、保健所では水質検査や飲食店当への立ち入り検査同行などが行われた。

■平成 27 年度夏期実習内容

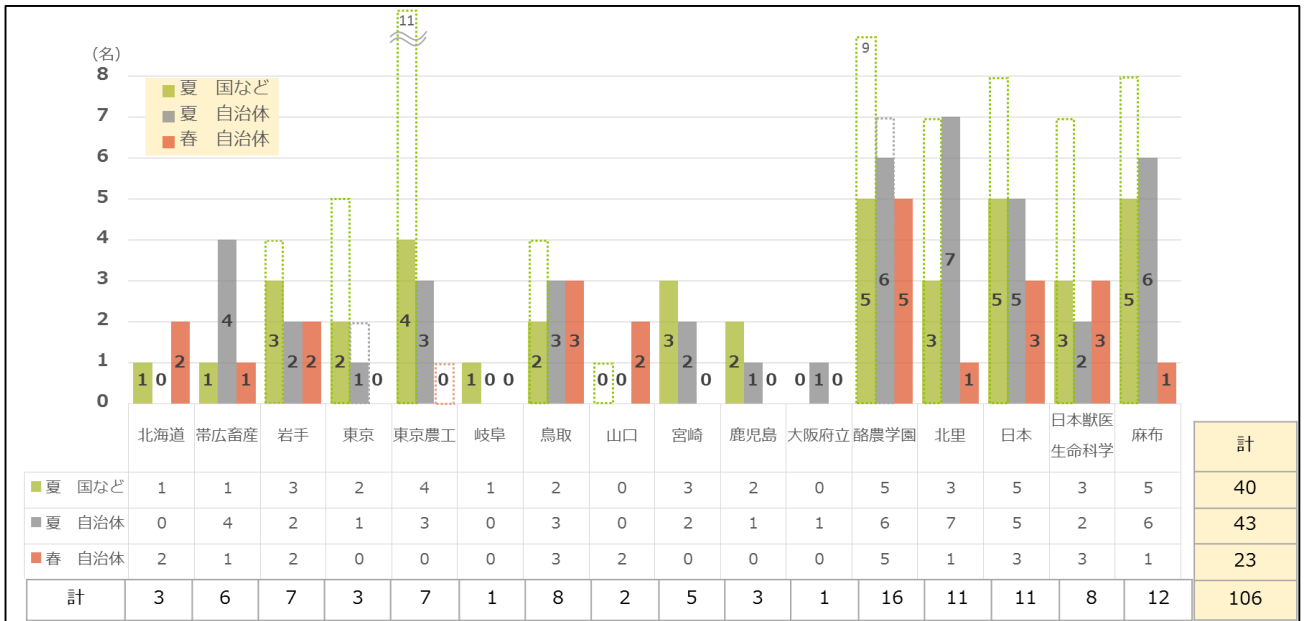


■平成 27 年度春期実習内容



応募学生および参加学生は以下のグラフの通り全国獣医系 16 大学全校からみられた。

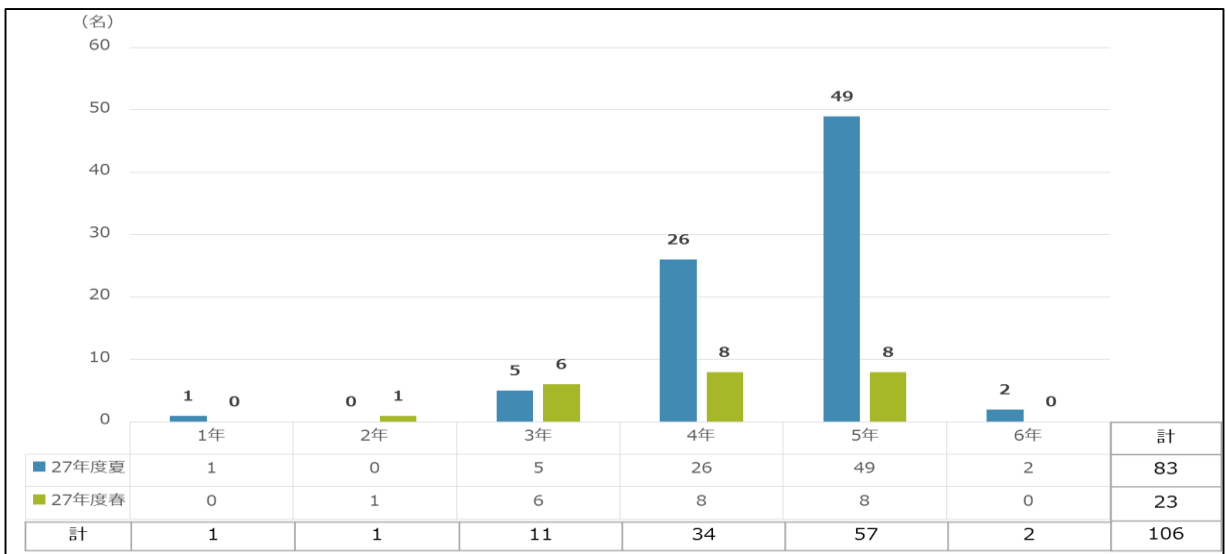
■平成 27 年度 全国獣医系 16 大学別実習参加者数 (点線:応募学生、実線:参加学生)



参加学生を学年別に比較すると以下のグラフの通りである。

募集要項に「参加資格」として 4~5 年生を指定している機関も多いことから、参加学生数は 4~5 年生が多い傾向であるが、3 年生以下の参加者も見られる。

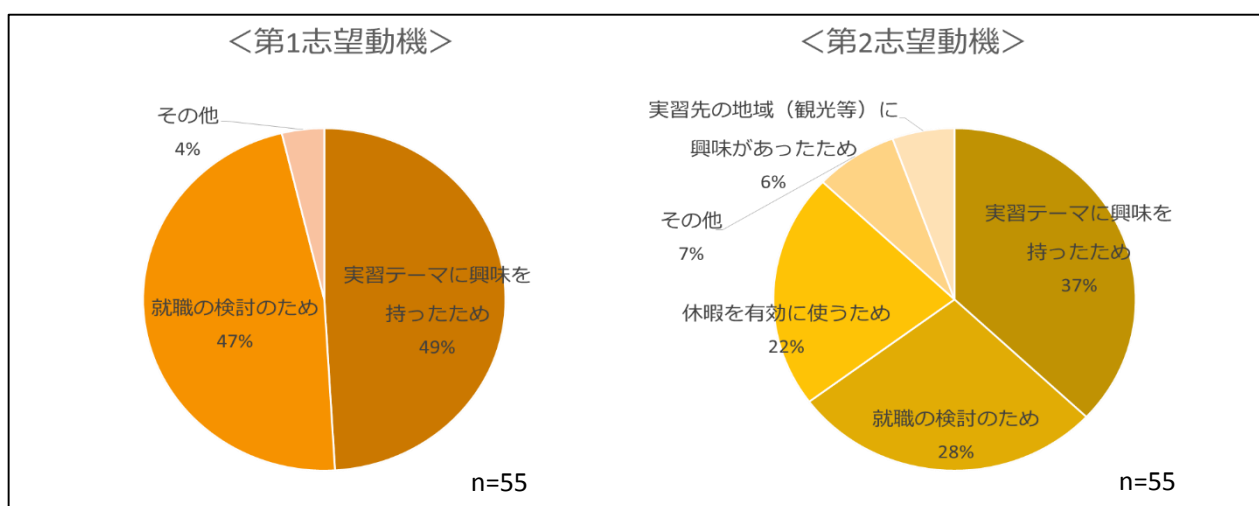
■平成 27 年度 学年別参加学生の比較



3) 実習の事後評価

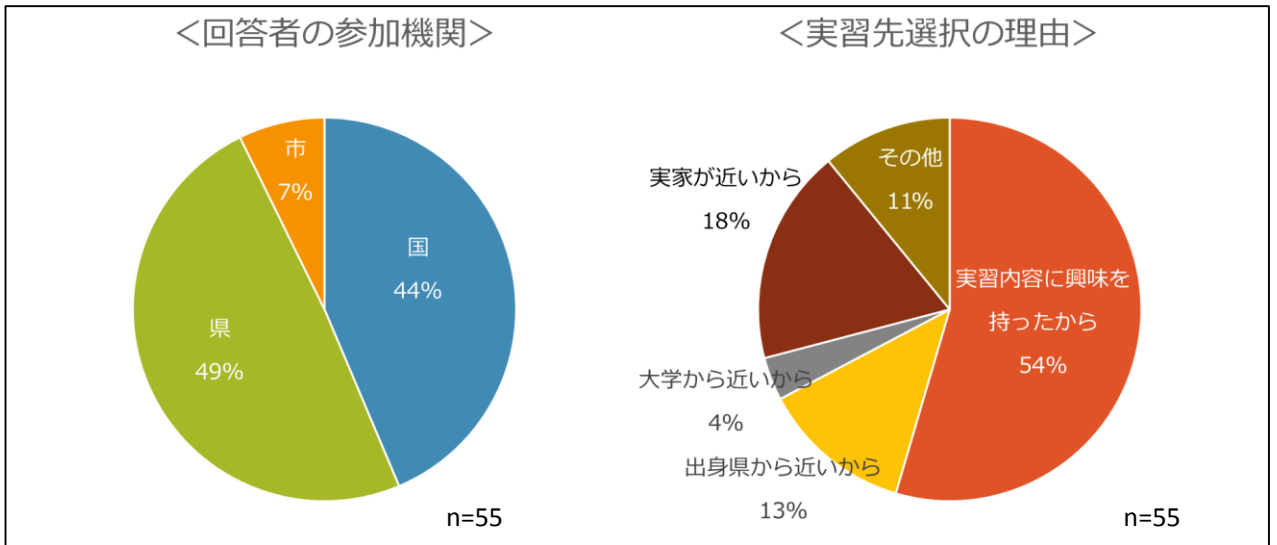
実習の事後評価として学生アンケートを行った。以下、夏期実習の参加者 83 名中、55 名から得られた回答である。実習に参加した動機は「実習テーマに興味を持ったため」が多く、次いで「就職の検討のため」だった。第 2 志望動機には「休暇を有効に使うため」も多く見られた。

■ 実習への志望動機



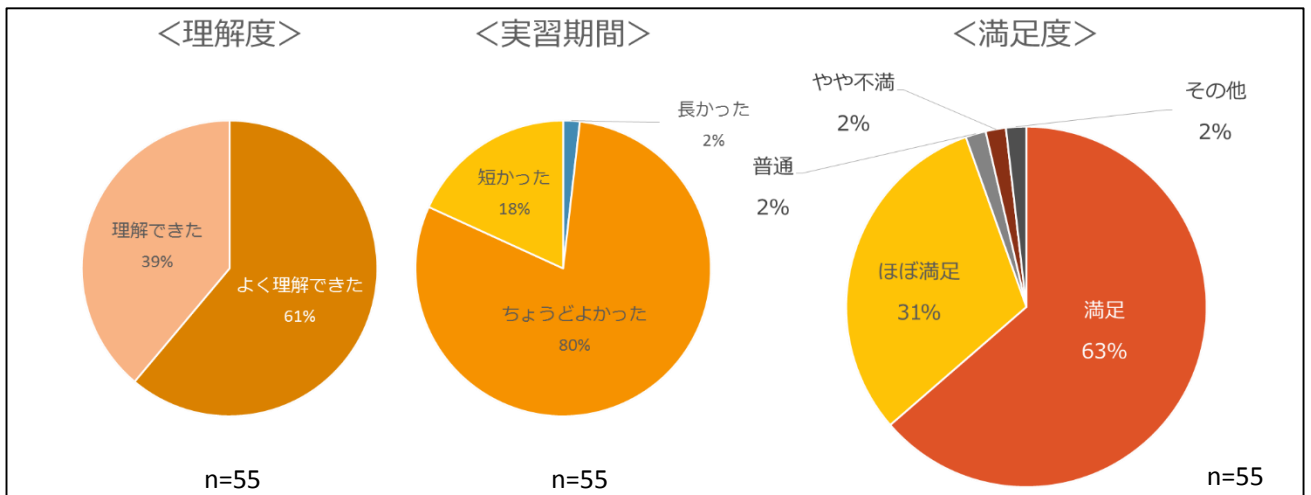
実習先選択の理由としては「実習内容に教務を持ったから」が多く、次いで「出身県が近いから」や「実家が近いから」という回答が多く、学生自身の地元近くの自治体が実施した実習へ参加する学生も多くいた。

■ 回答者の参加機関比率と実習選択の理由



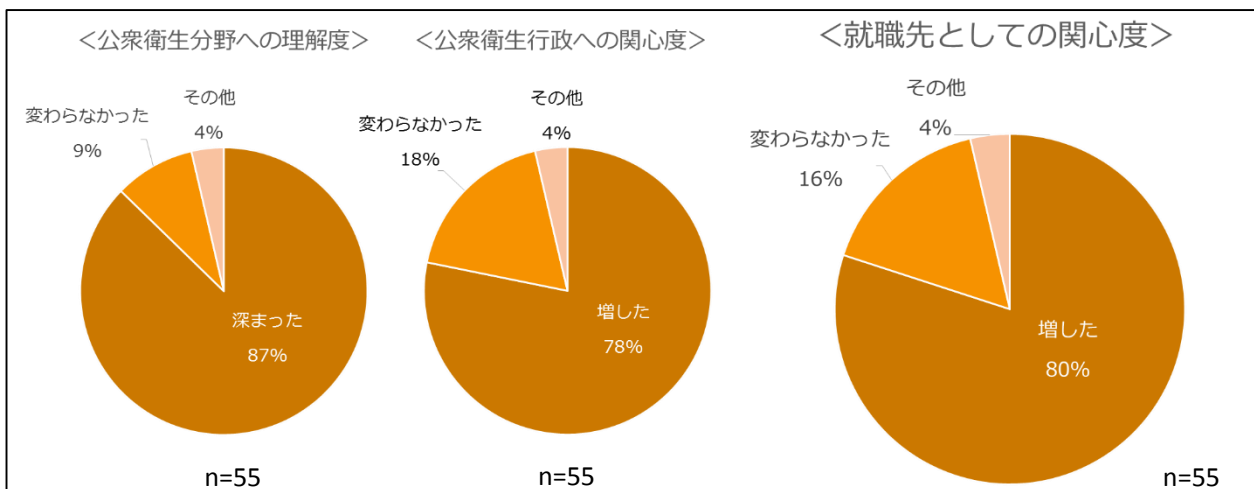
実習内容に関する理解度調査では「よく理解できた」と「理解できた」で100%を占めた。また、実習期間に関しては「ちょうどよかった」という回答が多く、実習に対する満足度は「満足」と「ほぼ満足」合わせて9割を占めた。

■ 実習内容の理解度、実習期間の適正、実習に対する満足度



公衆衛生分野への理解度、関心度、就職先としての関心度を調査した結果、実習に参加したことで理解が「深まった」という回答が多く、関心度も「増した」という回答が多かった。就職先としての関心度も「増した」という回答が多かった。

■ 公衆衛生分野への理解度、関心度、就職先としての関心度



実習終了後アンケートの自由記述欄「実習の感想」「実習の良かった点」「実習の悪かった点」「関心の変化」「獣医学生としての変化」への回答結果は、それぞれ以下の通りであった。

■ 実習の感想 (35名 (1年: 1名、3年: 1名、4年: 13名、5年: 20名))

今までは職場体験のような、とりあえず現場に放り込まれる形だったためきちんと講義があってそれをもとに実習が進んでいく形式はととてもわかりやすかった。そのぶん受け身になりやすく能動的に手や口をだして行動にうつしていかないと意見や疑問などもないまま漫然と実習が終わってしまうことも実感した。馬に興味があるといって実習に参加するにはあまりにもお粗末な前知識しかなくて実習を受ける側としての自覚が足りていなかったように思う。

大学の授業では具体的にはやらないところであったので、とても新鮮な実習だった。胴部付け根機序の業務が法律に基づいて行われており、国内の動物を守るために検査はととても精密に行われていることがわかりました。3日ごとに異なる部署を回れたことも非常

に良かった。
自分が本当に県職員になったらどんな職場でどんな業務をするのか、具体的にイメージでき、将来の進路について、これまでよりさらに深く考えるきっかけになった。また、他大学の実習生と関わって、将来についての考えを知り、刺激を受けた。
実際の診療や雰囲気にあたることができ、進路を考えるうえでいい刺激になった。
興味を持っている動物愛護行政に特化した実習内容を組んでいただけて、大変勉強になり、参加して本当に良かった。
大学では、授業で馬に触れる機会がほとんどない。この実習では馬の解剖学や扱い方といった基本的なことから、屈腱炎、採血、補液、エコー検査、レントゲン検査といった実践的な内容まで先生方につきっきりで教えてもらうことができた。学生は比較的少人数だったため、すぐ質問できた。講義を行ってから、その後実習という形だったので、習ったことをすぐに目で確認することができ内容を理解しやすかった。JRAの獣医師以外に厩務員さんと話す機会も多くあり楽しかった。馬に関心を持っている他大学の学生と交流できたこともよかった。
もともと興味があった動物愛護行政について、現場で働いている人から直接お話を聞いたのがとても良かった。公務員の印象が凄く変わった。
食品衛生検査所を中心に、食品衛生分野の業務について学ばせていただいた。座学から入り実習を行うことで、理解度は上がった気がする。市場監視業務など、あまり想像のしやすくない業務についても体験できたため、進路決定の一材料としては大きなものになった。
毎日が勉強でとてもためになりました。馬の扱い方から麻酔のかけかたまで様々な経験ができ、よかった。座学だけでなく、毎日の集牧があったため、馬に触れることができ、馬の安全性や危険性も感じることもできた。また、一度講義を行ってすぐに実習というサイクルがあったため定着度がすごく毎日の復習がとてもしやすかった。
(実習に参加した)自治体の職員となった場合に勤務する可能性のある職場を数多く見せて頂いたため、具体的な仕事をイメージすることができるようになった。
成田支所では大きく分けて係留施設検査業務、航空貨物検査業務、空港カウンター業務の3つがあり、それぞれについて毎日どのようなことを行っているのか、どのような環境で働いているのか、職場の雰囲気はどのようなのかなどといった実際に

<p>行ってみなければわからないことをたくさん知ることができて非常に有意義なインターンシップであり参加してよかったと思えた。</p>
<p>資料等を有効に活用し、実際の業務内容についてわかりやすく説明してくれた。そのため検査で市場やスーパー、処理場を回ったときに、今「何をしてるか」や「何を見てるか」が理解しやすかった。</p>
<p>今回参加した実習先（食肉衛生検査所）は、学内の実習で食肉衛生検査所を訪れたことはあったが、検査所の中に入ったのは初めてだったため良い経験となった。</p>
<p>大学の講義や実習ではわからなかった公衆衛生獣医師の魅力ややりがい、実際に仕事をされている方と話すことで伝わってきた。</p>
<p>公務員獣医師の仕事の内容を実際に見学・体験することができ、よい経験になった。</p>
<p>実際の業務に参加し、具体的な業務内容や時間、異動、給料などを知ることができた。</p>
<p>実習先（動物医薬品検査所）で実際に行われている検査手技を学べたことが良かった。今、学んでいる大学の講義ともつながる部分が多くあることを実感できた。5日間では学びきれないと感じた。また、慣れてきた頃に最終日を迎えたため、もう少し期間があれば良いと感じた。</p>
<p>衛生部局の公務員獣医師の仕事の一端が理解でき、さまざまな職員と話すことで公務員獣医師の辛さや楽しさを聞くことができた。これからの就職活動のモチベーションUPにつながった。</p>
<p>面倒を見て下さった職員の方はとても人柄の良い方々ばかりで、業務の内容に限らず様々な話を聞かせて貰えた事は為になったと同時に楽しく実習を受けられた。</p>
<p>普段の大学生活では経験できないような馬の解剖や臨床検査・診断、全身麻酔等を実際に体験でき、とても有意義で内容の濃い5日間を過ごすことができた。エコーやX線など、まだ大学では特に学んでいない分野も実際に実習する機会があったが、丁寧な指導のおかげでよく理解できた。解剖→臨床検査という流れがあり、体構造が頭に入った上での実習は理解しやすかった。また、他の実習生とも交流を持つことができ、良い刺激になった。</p>
<p>実際に豚や魚などから採血を行った。大学では学べない内容が多く、とても勉強になった。</p>
<p>実習先の担当の方にととてもよくしていただき、普段見えない部分がたくさん見ることができて充実した実習となった。</p>

<p>参加した自治体（札幌市）における、獣医師が担当する衛生職という職域に関して隅々まで学び、体験することが出来た。「衛生学」という言葉がフォローする範囲がとても広いことを感じる事が出来、それをくまなく担当することになる札幌市の公務員としての業務に魅力を感じた。</p>
<p>普段行われている業務をただ体験するというだけでなく、その業務を行う意義、使命に関する講義もあり、目的意識を持って実習することができた。ラボワーク主体の実習だったが、実習を行う前には詳細な説明があり、また質問に対しても快く応じてくださり、実習内容を概ね理解することができた。実習内容には大学で学んだことのあるものもあったが、この実習に参加しなければ知りえなかったことも多々あり、大変勉強になった。</p>
<p>実習内容に関しては大学の実習で教わったことのある手技がほとんどであったため目新しさは無かったが、それよりも国家公務員の職場、業務内容を間近で見学できたということの方が有意義であったように思う。</p>
<p>動物保護管理センターにて、自治体が行っている動物愛護行政について学び、飼い主さんの知識を深めていくことが、殺処分を減らし、愛護達成へとつながっていくと感じた。</p>
<p>部門ごとに研修内容が様々だったので毎日飽きることなく実習を行うことができた。</p>
<p>馬に関する知識は教科書で得た程度のものしかなかったが、馬との接し方、解剖学など基本的なことから内視鏡検査や全身麻酔といった所まで教えていただき大満足だった。また、講義をしてから実習という流れが非常に理解しやすかった。集牧も毎日あり、毎日馬と触れ合うことが出来たのも良かった。</p>
<p>普段学校では触れる機会が少ない馬に触れることができた。解剖を見学し、実際に臓器などにも触れることもでき、レントゲンやエコーを実際に行うこともできた。すべてが新鮮で、とてもためになる実習となった。馬の扱いというのは大きいということもあり、怖いと感じることもあったが、よく馬を理解して接するというのが大切だと改めて感じ、そのための知識も身につけられたと思う。同じく実習を受けていた他大学の学生の方々と知り合えたことも良かった。すべてがかけがえのない経験となり、素晴らしい5日間だった。</p>
<p>馬の臨床実習は、普段大学で学ぶ機会がないため、今回の実習に参加し馬の臨床診断を行うことで、紙の上だけでは学ぶことのできないことを学ぶことが出来た。</p>

<p>インターンシップに参加する前は、食の安全を守る獣医師といっても、具体的なイメージが浮かばなかったが、今回参加したことで食の安全はとても厳重に、慎重に守られているということがわかった。またとても広い範囲であるということもわかった。将来の具体的なイメージをつかむことができ、すっきりした感じがした。実習では、とても恵まれた環境で実験しているということがわかった。実験環境が良いところで働きたいと思った。</p>
<p>今まで公衆衛生部門の公務員獣医師の話聞いたことがなかったので、全てのことが新鮮であった。就職先を考えるいい機会になった。</p>
<p>今まで、公衆衛生獣医師の仕事をあまり理解していなかったが、今回どんな仕事をしているのか知ることができた。資料をもとにそれぞれ分かりやすい説明があったので良かった。</p>
<p>就職した際に配属される場所を実際に見せていただき、それぞれの場所で講義・実習が行われていたため、仕事に対するイメージがわきやすかった。参加した自治体（札幌市）では獣医職でなく衛生職での採用となるため、他の自治体と比べ職務内容がより多種多様である印象を受けた。</p>
<p>国際会議の開催の仕方、ロジ面などでの学び、また参加者との交流など、楽しめた点が非常に多かった。</p>

<p>■実習の良かった点 (38名(1年:1名、3年:2名、4年:15名、5年:20名))</p>
<p>今回の実習は全体としてまず馬に慣れ、自分がどの程度馬について知っているのか、どの程度馬を扱えるのかなどを再確認できた点。馬のよくある病気程度は知っていたが、最先端の研究やこれからの競馬界の方針はもちろん基本的な解剖すらあやふやだったため、これから臨床の授業が始まったときは復習しながらしっかり身につけたいと思った。また、実習中は馬のことだけではなくこれからの獣医医療と、それに自分がどう関わっていきたいのか、今後何がしたいのか、そのためにはどういう身の振りをすればいいのかを考えさせられる5日間だった。</p>
<p>どこの部署でも多くのことを見せていただいたほか、実際に体験しながら教えていただけた点。また、懇親会などがあり実際に働いていらっしゃる方のお話を聞いたこともよかった。</p>

<p>実習先の県職員の方々が期間中常に付いてくださり、たくさん話ができ、実習の内容以外にも多くの収穫があった点。待ち時間などほぼなく、あっても職員の方が様々な話を聞かせてくれた点。</p>
<p>専門的な知識が得られた点。</p>
<p>興味を持っている分野に特化した、充実したプログラム内容だった点。お世話になった全ての方が親切で様々な話をしてくださった点。</p>
<p>学生の人数に対して、先生の人数が多く気になったことをすぐに聞ける点。講義の後にすぐ実習を行った点。講義中心ではなく、実習中心で大学では見られないものや体験できないことが多かった点。馬に触る機会が多かった点。</p>
<p>実習先の方々にとても親切に接して頂き、仕事の事も含めて獣医の先輩としてたくさんの事を教えて頂いた点。</p>
<p>5日間という短い期間ではあったが、その中で様々な検査を少しずつ体験できた点。字面から想像のしにくい業務についても体験できた点。質問にも親身に答えて下さった点。食肉処理場に立ち入って見学することができた点（これまではガラス越しでしか見学したことがなかった）。</p>
<p>馬の獣医師を目指している中、大学でなかなか学ぶことができない馬を毎日、見られた事がよかった点。講義後の実習という流れがとてもよかった。また、“卒業試験”という、緊張感が増す機会があったため、目標設定ももちやすく5日間モチベーションを落とさず、実習に努めることができた点。</p>
<p>多くの職場を見せていただけた点。多くの人と話すことができた点。仕事の内容、環境について丁寧に説明していただけた点。</p>
<p>動物検疫に対して、具体的にどのようなことを行っているのか、どのような人々が働いていてどのような考えを持っているのかなどを知ることができた点。</p>
<p>質問にも親切に対応していただいて、今何やっているかがわからないなどのおいてけぼりにならなかった点。</p>
<p>実際に参加して、現場の仕事を間近で見ることができた点。</p>
<p>短期間の割にいろんなところへ行けた点。重要な保健所は見ることができた。</p>
<p>県で働く獣医師の職場をたくさん見せていただき、多くの人と話せる機会を設けてくれた点。</p>
<p>実際に動物と触れ合ったり、普段は見ることのできない工場などの内部に入ることができた点。</p>

<p>事前に集合場所や時間、担当の方が書かれていたので迷うことなくスムーズに実習ができた点。担当の方がつきっきりで実習して下さった点。</p>
<p>その検査を行う意義などからしっかり教えていただけた点。採血などの手技を体験できた点。</p>
<p>実際の仕事が間近で体験でき、有意義な時間を過ごせた点。</p>
<p>食鳥処理場等の普段見られない施設や動物愛護センターでの保護動物の治療など、大学で見学に行った時よりも踏み込んだ場面も体験させて頂けた点。とても良い経験だった。</p>
<p>見学だけではなく、実際の仕事を予想以上に多くやらせていただけた点。</p>
<p>職員の皆さんがお忙しい中、私たちをととても歓迎してくれた点。体験型でインターンシップを行うことで、より業務内容が分かりやすくなった点。</p>
<p>実習先の方がとてもよくしていただき、動物の殺処分についてたくさんのことを学べた点。</p>
<p>食肉衛生検査センターで暇な時間がほとんどなく常に専門的な知識を教えていただけた点。</p>
<p>獣医師が担当する衛生職の業務の隅から隅まで見せていただいた点。普段は体験できない場所（市場の早朝監視、実際の企業への食肉衛生監視への同行など）への実際に行く実習が多かった点。</p>
<p>業務内容を知ることができた点。新しい知識を習得できたこと点。職員の方々と交流できた点。</p>
<p>職員の方々が業務を行う様子を間近で見学できた点。また、実習先（動物医薬品検査所）の方々は実習内容として予定表に記されていないことでもインターンシップ生である私たちのためになるなら、と積極的に様々な作業を体験させて下さったため、大変勉強になった。</p>
<p>担当者の方が丁寧であった点。実習の内容（1日目と5日目）がとても充実しており、勉強になった。</p>
<p>センターの方々が非常に良くしてくださり、短い時間の中で色々なことを伝えようとしてくれているのがはっきりと分かり、それに比例して様々な業務を経験させて頂けた点。自分にとって大きな経験となった。</p>
<p>皆さん親切に指導してくれた点。授業でやった内容から応用まで学ぶことができた点。</p>

『馬を勉強したい』という思いで行ったが、日本の馬臨床・研究におけるプロフェッショナルの方々から教わる事が出来た点。
毎日、馬の集牧ということで生きた馬に触れることができた点。さまざまなことを実際に自分でやるというのができた点（レントゲンやエコー、採血、包帯を巻くなど）。獣医師や厩務員の方々がついていてくださり、質問などにすぐ答えてくださった点。実習前にはしっかり講義をしていただき、その実習に入る前に知識を得た状態で実習を受けることができた点。
実習の直前に対応する講義を受講するスケジュールだったので、より知識を深めることが出来た点。
実習先の職員の皆さんがとても親切に接して下さった点。あらゆる質問に答えて下さった点。学年がもっと上にならないとできないような実験ができた点。日本の食の安全の最前線の現状を見たり聞いてりして知ることができた点。公衆衛生獣医師はどのようなことを知るべきなのか少しでもわかった点。
どんな業務があるか隅々まで教えて頂いた点。
保健所、食肉衛生検査所、動物愛護センターと3ヶ所回ったため、それぞれの場所の特徴を知ることができた点。
少人数で対話式なため職員の方々と話しやすかったのが良かった。大学の説明会などでは聞けない生の声が聞けるのがインターンシップならではの良かった。また、様々な職場や職務を知られたのが一番の収穫であり、中央卸売市場や円山動物園など札幌市ならではの職場も見ることができて良かった。
自由にやらせてもらえた点。一方向ではなく、インターンが自分で考え、行動できるきっかけを提供してくれた点。

■実習の悪かった点 (22名(1年:1名、3年:1名、4年:9名、5年:11名))
今回は実際に研究している現場や内容を具体的に見ることができなかった点。
興味のある実習内容が含まれていなかった点。
一貫して作業を行うことのできた検査が少なかった点。
5日間と期間が短かく感じた点。また、実習生に任せられない点もあるかと思うが、昼間の集牧だけでなく朝の放牧もプログラムに組み込まれていたらよかったと感じた。
合計6人の参加者がいたが、2人ずつの班のまま固定で10日間を過ごしたため、ほかの参加者とあまり交流する機会が無かった点。

業務説明が多かった点。見学だけでなくもう少し体を動かすこともやりたかった点。
検査などの業務の実習は、見てのだけでごく簡単な作業だったため、この実習でやる意義が感じられなかった点。
台風が来ていたことから、予め台風で実習ができない場合のことを考えておくべきだった点。
実習人数が6人と多く、一人当たりの実習時間が短くなった点。
立地場所が遠かった点。愛護センターのみの実習が1自治体（愛知県）だけだった点。
動物愛護センターで暇な時間が多くあり、また、獣医師としての仕事とは思えない業務がほとんどであったため物足りなく感じた点。
少し日程が詰められていたので一つの施設をもうちょっとじっくり見たかった点。
実習日誌を最終日にすべて提出するように言われたので、最終日の実習日誌を書く時間があまりなかったこと。
保健所の担当者の方が多忙なこともあり、2～4日目の実習で時間が空いてしまうことがあった点。それに対し、5日目は実習の内容に対して時間が少なく感じた点。
宿泊費や、移動費が（5日間の実習だったため）多くかかった点。
実習期間が物足りなく感じた点。毎日バスに乗っていかなければならず、宿泊するのであれば近くの寮などがあればよかった点。また、同じ実習先の学生と同じ宿泊場所であれば、もう少し交流を持つことができたと感じた。
高学年や就活を控えた人に対しては、職場の雰囲気理解するために期間が少し長い実習の方が良いと感じた。
待ち時間などが長い時があったので、期間を短くしても良いとは思った点。
実習の告知がVPcampのホームページ上のみだったため、もう少し広報を工夫して欲しい点。
自分の予習が足りてなかったこと点。

■ 関心の変化 (34名(1年:1名、3年:2名、4年:14名、5年:17名))
実習に参加したことで、志望する就職先へ希望を捨てずにいようと考えた。
想像していた業務とは異なる業務もあったが、生体動物の検査以外にも書類の作成など重要な業務がたくさんあることを知り、自分も将来何らかの形で日本の家畜防疫に貢献したいと感じた。

<p>始めは実習先（JRA）の業務に全く興味がなかったが、とても魅力的なやりがいのある仕事の一つに思えた。</p>
<p>実習前まで公衆衛生業務に関して持っていたイメージは、「獣医学の知識が本当に必要とされるのは屠畜検査と保健所や動物愛護にかかわる業務であり、検査業務の場合は必ずしも必要とは限らない」というものであった。今回の実習内容では、前から持っていたイメージ通りであったため、関心の変化はなかった。</p>
<p>以前よりずっと公務員が就職先の候補になった。</p>
<p>参加前は JRA での仕事について漠然としたイメージしかなかったが、参加したことで仕事についてより具体的にイメージすることができるようになった。具体的なイメージができるようになったため、就職へのモチベーションが高まった。</p>
<p>お世話になった職員皆さんの仕事に対するモチベーションも高く、獣医師としての社会貢献度の高い職場であると感じた。また福利厚生が手厚いという事を実際に聞いて大切だと感じた。</p>
<p>元々実習先が地元と言うこともあり、就職先としては有力 3 候補には挙げていた。県職員の業務に食鳥検査が含まれないというのが最大のネックではあるが、今回実習に参加し、地元での就職も良いと感じた。他の分野の実習にも参加し、検討はしたい。</p>
<p>実習に参加する前から馬の獣医師を目指していたため特に大きな変化は無かったが、より獣医師としての知識を学ぶべきだと感じた。また、以前よりも臨床獣医師と研究者のどちらへ進むのか悩みが増えた（どちらのよい点も見つけてしまったため）。</p>
<p>公衆衛生業務に対して前向きなイメージがなかったが、この実習に参加して職域も広くやりがいのある仕事だと感じ、就職先として考えていきたいと思うようになった。</p>
<p>どのような業務内容かを知ることで自分が就職したときのイメージを持てた。また、今回知った業務内容は自分に向いていて、働きたいと思えるものかをより深く考えることができた。</p>
<p>公務員への関心はある意味では増し、ある意味では減った。と畜検査、微生物検査など、やりたいこともあったが、その一方で苦情処理などの心苦しい仕事も多いと知り、そちらの面を見ると関心は減ったと言える。やりたいことの理想と現実のバランスが難しいと感じた。</p>
<p>今まで公衆衛生獣医師の魅力がわからなかったが、思っていたより色々なことができ、やりがいを見つけられる仕事だと思った。</p>
<p>臨床を経由して公務員になる方と、新卒で公務員になるのでは業務内容が異なることを知り、一度臨床を経験してから就職するのもよいと思った。</p>

<p>就職先は少し興味がある程度で今回参加したが、実習先（動物医薬品検査所）で働く獣医師の方々と話したり、姿を実際に見たりして関心が増した。</p>
<p>食肉センターでの獣医師の仕事が理解できた。職員の方がいきいきと働いていたことが印象的だった。</p>
<p>公務員への就職も考えていたが、実習に参加したことでイメージが具体的にになり将来の選択肢としてより現実的に考える事が出来る様になった。</p>
<p>実習前は就職先としては特に考えていなかったが、雰囲気や実際の職務体験に触れて関心が増した。</p>
<p>将来は動物を扱う仕事を希望しているが、実際に動物を扱うことの多い職場だと知り、興味を持った。</p>
<p>食肉衛生検査センターのような専門的な知識を必要とする職場への興味は大きく増し、将来的に就職しても良いと考えるようになった。</p>
<p>漠然と公務員の仕事を把握していた自分にとって、実際自分たちが就くであろう仕事を目の当たりにしたことは、就職先を考える上で選択肢に入れやすくなったと感じる。</p>
<p>元々就職先として考えており、その考えを確固たるものにするために実習に参加した。業務内容の意義、使命を理解し、また普段の業務内容を実際に体験できたことで、就職先としての関心が増した。</p>
<p>元々は小動物臨床獣医師を目指していたが、その他の職業も考えるようになっていた。実習に参加したことによって、動物用医薬品という形で動物衛生、ひいては公衆衛生に貢献できる可能性を知ったことで、公衆衛生獣医師に関しても就職先の視野に入れてみたいと考えるようになった。</p>
<p>具体的にどのような仕事をしているのか実感が湧いた。動物愛護などの実情などを含めて、都道府県によって実施していることが様々であることを知り、就職先を選ぶ上で参考になった。</p>
<p>愛護行政について実習前は深い知識はなかったが、獣医として一般の人へ知識を広げていくことの大切さや、ペットとしての動物が増えてきている都市部での愛護行政の重要性を感じたため、就職先としての関心が増えた。</p>
<p>実際に働いている職員の生の声を聞くことができ、また長期研修にきていた家畜保健衛生所の方々の話も聞くことができ、職業選択の参考になった。</p>
<p>馬の獣医師を見たことが無かったため、職業の選択肢としては実習へ行く前は無かったが、実際に馬に携わる獣医師の仕事の一部を見ることで馬に携わる現場もあるのだと、選択肢が増えた。</p>

<p>漠然と小動物臨床へ就くことを考えていたが、馬に興味が出てきて実習に参加し、馬の獣医に対しての関心がとても増した。良い点を見ることが出来たのと同時に、厳しい点も知ることが出来て良かった。</p>
<p>以前から興味のある分野ではあったが、日常業務や勤務しておられる先生方と会話することで、より関心が深まった。</p>
<p>職員の方とたくさん話す機会があったので、休暇のことや、勤務時間、職場環境についての情報をたくさん得られた。話を聞いて、自分の生活や趣味と両立可能な職場としてとても魅力的だと感じた。仕事内容の面からも就職先として考えてよいと思った。</p>
<p>一度も公衆衛生行政を考えたことがなかったが、詳しく知り公衆衛生行政の職域もやりがいのある仕事と感じた。</p>
<p>地元というだけでなく、実際に行ってみてより関心が増した。職場の雰囲気がとてもよいと感じた。</p>
<p>これまで大学の講義や説明会で公衆衛生行政について話を聞く機会があったが、実際にどのような仕事をしているのか分からずあまり興味を持てなかった。しかし実際に現場を見たことで、具体的な職務内容や市民のために働いている様子が見えてきて、やりがいのある重要な仕事であることが分かった。また同時に就職先の一つとして検討するようになった。</p>
<p>公衆衛生、特に感染症制御についての各国の立場と何が求められているのか、その受容野将来の方向性などが理解できた。</p>

<p>■ 獣医学生としての変化 (31名(1年:1名、3年:2名、4年:13名、5年:15名))</p>
<p>大学の制度上三年生からしか専門の授業が始まらず中でも臨床の授業は四年になるまで始まらないので歯痒く感じていた。また臨床にいきたい一心で、私大と比べて何もできずに悲観的になっていたが他の国立大もあまり状況はかわらないことがわかった。まずは基礎研究など今しかできないことをしっかり積み上げていくことが大事であり、それがよけいな焦りも排除してくれることを学んだ。</p>
<p>法律が重要であることを学んだほか、人とのコミュニケーションも重要であることを実感した。</p>
<p>学校での細菌学実習や公衆衛生・食品衛生実習の内容が検査業務の現場でも使われていると知った。しかし現場ではもっとシビアに、混入や汚染のないように、かつ期限までに多くの検体を扱うとわかり、しかもそれは行政処分を行うかどうかのた</p>

<p>めの検査であると、実感できた。食品検査所、屠畜場、精肉店、小売り店を見学し、肉がどのように流通していくか、一連の流れを見ることができたため、より実感が増した。大学で学ぶことの一つ一つが重要で、一生ものの知識であると改めて感じたので、今後に活かしていきたいと思う。</p>
<p>以前よりも将来は獣医師として社会に貢献しなくてはいけないと思うようになった。</p>
<p>実習に参加したことで、所属大学の獣医学生の中では馬についての知識が1番あると思える自信が出た。将来、馬の獣医師になるとしても広い視野を持つておくために、今大学で勉強している犬、猫、牛、豚についてもしっかりと学んでおこうという学習意欲を持った。より積極的な獣医学生に変化したと感じる。</p>
<p>将来、どういう立場であっても人と動物を思い、社会貢献できる獣医師になりたいと感じた。</p>
<p>どちらかという臨床よりは公務員志向だったが、より公務員に気持ちが傾いた。また、自分が世間知らずな面が強かったと感じていたが、今回職場に触れることで、少しは改善できたのではないかと感じる。</p>
<p>薬一つでも、先生によっては違うが基礎となる知識は同じであり、また、厩務員からの意見を聞いたことでどんな馬の獣医師が求められるかも知ることができた。その中で今できることを最大限に行動し、また、現在通っている乗馬クラブでも学べることもあるため（馬の扱い等）残りの学生生活を精一杯活用していきたいと感じた。</p>
<p>公衆衛生分野の授業科目は文字の暗記ばかりだと思っていたが、そのような知識を必要とする現場を見たことによって意識が変わった。また、幅広い知識を必要とすることがわかったので偏りなく勉強しようと思った。</p>
<p>今まで、家畜伝染病予防法や狂犬病予防法などについて大体の知識はあったものの、今回のインターンシップを通して家畜防疫官はそういった法律に基づいて仕事をしているのだと知ることができ、法律をより身近に感じることもできた。</p>
<p>実際に勉強している知識を実習でも使うことがあり、基礎から知識をつけなおしたいと感じた。</p>
<p>知識を学ぶだけの学生から、身につけた技術をどう社会に還元するか考える獣医学生になろうという意識が芽生えた。</p>
<p>以前より行政機関への就職を真剣に考えるようになった。</p>

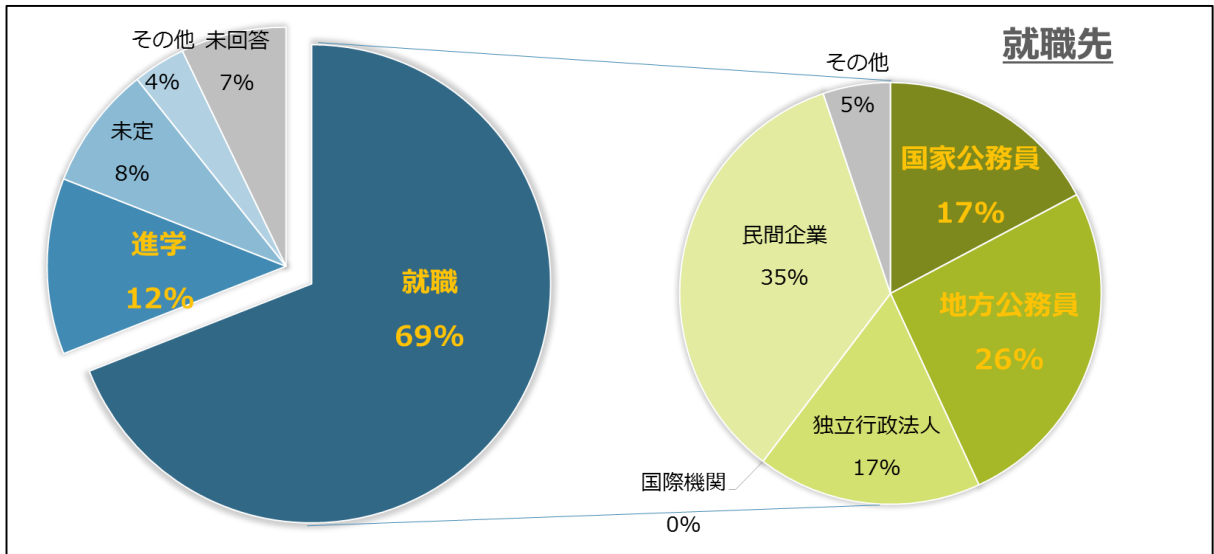
<p>獣医師の職域の広さというものを改めて感じ、対動物だけではなく人とのつながりも大切にしたいと思うようになった。</p>
<p>公務員獣医師としての働き方がイメージしやすくなり就職活動のモチベーションが上がった。</p>
<p>実際の現場に立ち会った事で、今後勉強で意識すべき点が明確になり、実践的な考え方が出来る様になった。</p>
<p>はじめは自分の今までの不勉強さにとても焦ったが、講義や実習を通じて貪欲に知識や技術を吸収できたように思う。教科書や図説で勉強し理解しているつもりでも実際の動物を通して学び直すことで新たな発見が得られた。今回 VPcamp を受講したことで、新たなモチベーションをもった新たな自分へ成長できたように思う。普段の大学生活へ戻ってもこの気持ちを忘れずに励んでいきたい。</p>
<p>いま、動物医薬品検査基準を国際的に統一しようという取り組みが始まっている中で、今日本はその中心国として活躍しており、自分が学んでいることは世界にも通用する知識であることを認識できた。</p>
<p>実際に公衆衛生行政の方がどのような仕事をしているのかを深く理解できた。</p>
<p>現場を見たことによってどのような病気があるのか、またそのときの対処法など授業とは違う生きた知識を得ることができた。</p>
<p>学校で習う公衆衛生を実際に目で見て肌で感じて、大学の实習だけでしか触れていない人たちよりも公衆衛生や衛生に関する深い視点などを持った獣医学生になれたと感じる。</p>
<p>動物用医薬品の安全性・有効性・品質がいかんにして確保されているのか、家畜における薬剤耐性菌の問題が人に対しても影響を及ぼすこと、家畜衛生は東アジア全体で取り組む必要があることなど、今までなかった知識や視点が身についた。</p>
<p>以前は国内だけの狭い視野で自分の将来を考えていたが、日本の動物医薬品検査の代表として世界でも活躍する動物医薬品検査所の皆様のお話を伺い、より広い、国際的な視野を持った獣医学生になれたと思う。</p>
<p>より実践的で現実的な問題を考えていかななくてはならない、という意識が自分の中で芽生えた。</p>
<p>今回の実習を通して、公衆衛生獣医師に興味を湧いた。地方の公衆衛生獣医師として働きたいと思った。</p>
<p>公衆衛生という点では、馬の輸入検疫などは検疫所が行っているため今回の実習で学んだとはいえないが、馬の感染症のワクチンを動衛研と共同で開発したりしてい</p>

<p>たなどの獣医師のお話を聞く中で、感染症の予防も行っているのだという知識が増えた。また JRA は競馬の開催を行っている団体だが、競馬はスポーツと娯楽という二つの面があり、人々の余暇を楽しませるといって公衆衛生に役立っているのだと思った。変化としては、獣医師は犬猫牛だけではない、と視野が広がったように感じた。</p>
<p>勉強不足を痛感した。今までの勉強では全く足りないと感じた。今後の大学での授業の受け方を考え直し、しっかり頭に残るように勉強しようと思う。実習など、学生ということを利用して参加できるものには積極的に参加しようとも思うようになった。また獣医師の仕事というのは厳しいものだということも感じた。思いを新たに入れ替えた獣医学生に変化したと感じる。</p>
<p>現場で働いておられる先生方と会話することで、大学生生活だけではわからなかった、企業に勤務する獣医師の考えを知ることができた。</p>
<p>VPcamp に参加する前は公衆衛生獣医師は国家公務員の場合、検疫所に勤務しているということしか知らなかったが、参加して国家公務員になると職場がローテーションして、様々なことを仕事とすることがわかった。また実験の技術も必要だと感じたので、今後、実験の講義をとろうと思った。自分の将来が具体的にイメージしやすくなったので、今後のために何をしておけばよいか理解した獣医学生に変化できたと思う。</p>
<p>獣医師であるが、人のために活躍する獣医師もいるため、多くの知識を身につけるためにも色々なことに関心を持ちながら勉学に励む必要があると実感した。</p>
<p>専門的な知識や技術は実際に働かないと身につかないものだと思うが、公務員獣医師の心構えは少し身についたと思う。職務内容はそれぞれ異なっても、すべては人々の快適な暮らしと安全を守ることに繋がっているのだということが分かった。</p>

4) 実習参加学生の進路調査

H27 年 3 月卒業および H28 年 3 月卒業予定の実習参加学生進路を行った。その結果、以下のグラフの通り、卒業生の 69%が就職し、12%が進学したことが分かった。就職した学生の内、43%が公務員獣医師（国家公務員 17%、地方公務員 26%）となったことが分かった。残り 17%の学生は独立行政法人に、35%は民間企業に就職をしている。

■ H27年3月卒業およびH28年3月卒業予定の実習参加学生進路



(参考) 獣医学生進路

(獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議(平成23年度～)(第15回)配付資料から抜粋)

公務員獣医師	19%
診療獣医師	51%
会社等	10%
その他	9%
未定	11%

3. 関連会議

1) 第1回コーディネータ会議

平成26年度本事業の報告および平成27年度本事業夏の実習状況報告のため、第1回コーディネータ会議を以下の通り開催した。

日時：9月3日（木曜日）9：30～14：00

場所：東京大学農学部フードサイエンス棟第1会議室

出席者：（敬称略）

北海道大学：苅和宏明

岩手大学：鎌田洋一

東京大学：杉浦勝明・望月学・山田章雄・芳賀猛・今村昌平・佐藤聡子

東京農工大学：白井淳資・竹原一明

鳥取大学：伊藤壽啓

山口大学：豊福肇

オブザーバー：（敬称略）

岐阜大学：小森成一

文部科学省 高等教育局 専門教育課：辻直人

議事次第：

1. 平成27年度大学における公共獣医事教育推進委託事業（分野1）の概要報告
 - (1)実習プログラムの実施状況
 - (2)事前講義プログラム収録・作成状況
 - (3)実習プログラムの開発状況
 - (4)現在の実習システムと今後の変更
 - ア 実習システム
 - イ VPcamp 以外の実習・インターンシップ
 - (5)事後評価
 - (6)その他（会計報告）
2. シンポジウムの日程等、（分野2）の概要報告（資料7）
3. その他

結果：

議事次第に沿って事務局が報告を行った。その過程で出された意見・提案は以下の通り。

■システム/運営について

- ・私立大学にもコーディネータを依頼し、システムについての意見を聞く。
- ・自治体はコーディネータに追加しない。実習後アンケートとは別に、機会があれば意見を聞く。
- ・VPcamp は各大学の既存の実習システムと統合はせず、各コーディネータ協力のもと、宣伝・運営をおこなっていく。

■受入機関について

- ・都道府県だけでなく、政令指定都市・中核市・特例市にも受入の依頼をする。
- ・家畜保健衛生所もプログラムに積極的に入れる。
- ・国の機関は、検疫所、輸入食品検査センター、医薬品食品衛生研究所等と交渉継続していく。
- ・advanced とともに、early exposure の観点から学年枠を広げることも検討していく。
- ・学生の旅費負担について、各受入機関に負担の可否を確認していく。
- ・学生の応募がゼロだった機関について分析をし、プログラム改善を提案する。

■コーディネータの担当変更について

- ・北海道は、豊福先生(山口大学)から苅和先生(北海道大学)にご担当いただく。
- ・都道府県については、実習スタートとなった自治体は東京大学が引き継ぐ。
- ・市については、従来の都道府県分担に従い、担当県に所在する市を各コーディネータが担当する(下記表参照)。

■事前講義について

- ・食鳥処理場の講義を追加する。
「食鳥処理場の概要と検査」 1コマ
「食鳥処理場での微生物制御 (HACCP を含む)」 1コマ

講師の候補：宮崎県 下村氏

- ・参加学生は、動画「実習を受ける際の心得」(加地祥文氏)を必修とする。

■ 学生の手引きについて

- ・女子のスカートは NG なので、学生の手引きを修正する。

■ 今後の広報活動について

- ・2月に秋田で開催する獣医師会(2月)の公衆衛生分野において、分野1および2の説明時間をもらう。
- ・16大学のWEBサイトに、VPcampサイトのリンクを貼ってもらえるよう、依頼する。
- ・公衆衛生獣医師協議会の会合に、チーフコーディネータが出席し、情報提供・意見聴取を行う。

■ 表7 コーディネータ担当市一覧

	担当大学	政令指定都市	中核市	特例市	
1	北海道大学	札幌市	旭川市/函館市		北海道
2	岩手大学		青森市	八戸市	青森県
3	岩手大学		盛岡市		岩手県
4	岩手大学	仙台市			宮城県
5	岩手大学		秋田市		秋田県
6	岩手大学			山形市	山形県
7	岩手大学		郡山市/いわき市		福島県
8	東京農工大学			水戸市/つくば市	茨城県
9	東京大学		宇都宮市		栃木県
10	東京大学		前橋市/高崎市	伊勢崎市/太田市	群馬県
11	東京大学	さいたま市	川越市/越谷市	川口市/所沢市/草加市/ 春日部市/熊谷市	埼玉県
12	東京農工大学	千葉市	柏市/船橋市		千葉県
13	東京大学		八王子市		東京都
14	東京農工大学	横浜市/川崎市/ 相模原市	横須賀市	小田原市/大和市/平塚市/ 厚木市/茅ヶ崎市	神奈川県
15	東京大学	新潟市		長岡市/上越市	新潟県
16	岐阜大学		富山市		富山県

17	岐阜大学		金沢市		石川県
18	岐阜大学			福井市	福井県
19	東京農工大学			甲府市	山梨県
20	東京大学		長野市	松本市	長野県
21	岐阜大学		岐阜市		岐阜県
22	東京農工大学	静岡市/浜松市		沼津市/富士市	静岡県
23	岐阜大学	名古屋市	豊橋市/岡崎市/ 豊田市	春日井市/一宮市	愛知県
24	岐阜大学			四日市市	三重県
25	東京大学		大津市		滋賀県
26	東京大学	京都市			京都府
27	東京大学	大阪市/堺市	豊中市/高槻市/ 枚方市/東大阪市	吹田市/茨木市/八尾市/ 寝屋川市/岸和田市	大阪府
28	鳥取大学	神戸市	尼崎市/西宮市/ 姫路市	明石市/加古川市/宝塚市	兵庫県
29	東京大学		奈良市		奈良県
30	東京大学		和歌山市		和歌山県
31	鳥取大学			鳥取市	鳥取県
32	鳥取大学			松江市	島根県
33	鳥取大学	岡山市	倉敷市		岡山県
34	山口大学	広島市	福山市	呉市	広島県
35	山口大学		下関市		山口県
36	山口大学				徳島県
37	東京大学		高松市		香川県
38	東京大学		松山市		愛媛県
39	山口大学		高知市		高知県
40	山口大学	福岡市/北九州市	久留米市		福岡県
41	宮崎大学			佐賀市	佐賀県
42	宮崎大学		長崎市	佐世保市	長崎県
43	宮崎大学	熊本市			熊本県
44	宮崎大学		大分市		大分県
45	宮崎大学		宮崎市		宮崎県

46	鹿児島大学		鹿児島市		鹿児島県
47	東京大学		那覇市		沖縄県

2) 第2回コーディネータ会議

平成27年度のまとめとして、第2回コーディネータ会議を以下の通り開催した。

日時：3月14日（月曜日） 12：00～14：30

場所：東京大学農学部フードサイエンス棟第1会議室

出席者：（敬称略）

岩手大学 : 鎌田洋一

東京大学 : 杉浦勝明・山田章雄・綱嶋るみ・佐藤聡子

東京農工大学 : 白井淳資

宮崎大学 : 後藤義孝

鹿児島大学 : 中馬猛久

北里大学 : 上野俊治

日本大学 : 壁谷英則

オブザーバー：（敬称略）

文部科学省 高等教育局 専門教育課：辻直人

議事次第：

1. 平成27年度事業概要報告
2. アンケート集計結果
3. 進路調査について
4. 来年度スケジュール
5. 会計報告
6. 意見交換
7. その他

結果：

議事次第に沿って事務局が報告を行った。その過程で出された意見・提案は以下の通り。

■コーディネータの依頼

酪農学園大学、日本獣医生命科学大学、麻布大学に、コーディネータを依頼する。

■実習開発状況について

・これまで参加していたが 28 年度不参加の機関について、不参加の理由を聞く。

例) 鹿児島県 = 28 年度より鹿児島大学の実習生受入のため、VPcamp 対応困難とのこと

■自治体への消耗品費について

・予算に余裕があれば、機関ごとに一律の価格でなく、(高価でも) 必要な消耗品の購入を検討する。

■進路調査について

・在学中の(公衆衛生分野への) 興味の変化→VPcamp への参加→公衆衛生分野への就職、という流れでデータ化できるよう検討する。

・公衆衛生分野への関心の高まりが VPcamp によるものか、公衆衛生担当教員によるものか区別する。

・進路区分を「国家公務員/地方公務員」でなく「公衆衛生系/畜産系」で区別する。

■次年度シンポジウムに関する案

・VPcamp 参加学生の登壇を検討する。

・各大学の重要な行事(学位授与式など)と日程が重ならないようにする。

■受入機関の募集要項について

・募集要項と実際の実習内容が大きく異なることのないよう、記載する。

※学生からの意見「ホームページ上の内容と実習の内容が異なっていた」(農工大の実習)

■参加学生の実習態度について

・受入機関アンケートで「学生の実習態度について」聞くようにし、情報を拾うシステムを検討する。

- ・事前講義「実習を受ける際の心得」を実際に視聴したかどうかチェックできるシステムを検討する。
- ・事前講義「実習を受ける際の心得」の内容を充実させる。
- ・手引き（VPcampBOOK）を改訂し、のぞましい実習態度の周知を図る。
- ・学生の実習態度について問題が起きた場合はコーディネータ間で共有する。

3) シンポジウムの開催

第2回コーディネータ会議と日を同じくして、「日本の次世代獣医師を育成するために」のタイトルで、シンポジウム（獣医学教育実習サミット）を開催した。表8の通り、本事業の進捗状況を報告するとともに、分野1の実習実施機関を代表して、愛媛県動物愛護センター所長が実習実施報告を行った。最後に「獣医学教育の国際」という表題の下、国際獣疫事務局（OIE）アジア太平洋地域代表他が登壇し発表を行った。

■表8 シンポジウムの進行

15：00～	「大学における公共獣医事教育推進委託事業」事業概要と今年度の実績
	杉浦勝明（東京大学 教授・分野1チーフコーディネーター）
	小森成一（岐阜大学 特任教授・分野2チーフコーディネーター）
15：30～	実施機関からの報告
	「愛媛県におけるVPcampの実施結果について」岩崎靖（愛媛県動物愛護センター長）
	「NOSAIにおける夏期臨床実習の現状と課題」横尾彰（全国農業共済協会企画研修部次長）
16：15～	「家畜保健衛生所でのインターンシップの現状と課題」桜井良恵（岐阜県中央家畜保健衛生所技術課長補佐）
	獣医学教育の国際化
	「獣医学教育及び獣医事法定機関に関するOIEの提言と取組み」釘田博文（国際獣疫事務局 OIE アジア太平洋地域代表）
17：15	「国際認証を目指す産業動物臨床実習 北大・帯畜大共同獣医学課程の取組」猪熊壽（帯広畜産大学教授）
	閉会

4) 第 103 回全国獣医系大学関係代表者協議会への報告

平成 27 年 9 月 6 日に開催された第 103 回全国獣医系大学関係者代表者協議会において、平成 27 年度本事業の夏期実習報告（事業概要、実習システム構築、広報活動、参加学生の傾向）を行った。

5) 第 104 回全国獣医系大学関係代表者協議会への報告

平成 28 年 3 月 29 日に開催された第 104 回全国獣医系大学関係者代表者協議会において、平成 27 年度本事業の報告（事業概要、実習システム構築、広報活動、参加学生の傾向、夏期実施アンケート集計結果）を行った。また、コーディネータが設置されていない大学に対し参加協力依頼を行った。

6) 獣医公衆衛生研究への寄稿

全国公衆衛生獣医師協議会発行の獣医公衆衛生研究（18-2 号 2016.03 発行）へ論文を寄稿し、本事業の周知及び報告をした。

4. 今後の課題

1) 受入機関の拡充の必要性

平成 27 年度は、47 都道府県および政令指定都市、中核市などの自治体に対して受入機関協力依頼を行った。事業内容のチラシ配布や自治体との面談によって VPcamp の周知活動を行ったが、自治体の中の一部部署にのみ情報が伝わり、実習を考えている部署に情報が伝達されていない事もあった。平成 28 年度は、自治体に対して部署ごとに細やかな情報周知をする必要があると考えられる。

2) 実習システムの更なる改善の必要性

平成 27 年度はホームページを利用した学生の応募手順や事務局への情報連絡などを整備した。日誌やアンケート回収の締め切り等があいまいな部分もあったことから、来年度以降は、実習前・実習後に適時的確にメールもしくは電話での連絡を行う。

また、今年度は国などの機関への応募が多く、学生の足きりを行う必要があった。自治体への応募に関しては概ね参加可能であった。人気のある機関と定員数に満たない機関をどのように補正してゆくかは今後の検討課題である。

3) 学生の認知度向上の必要性

本事業ホームページへのアクセス数を Google Analytics を用いて解析したところ、実習の募集開始に合わせてホームページへのアクセス数が高くなったことから (P.15)、「VPcamp」という愛称や実習の情報が広がり始めていると推測できる。また、今年度開設した Facebook のページは常に一定の閲覧数があり、ページに記事が投稿されることで閲覧数も上がった (P.15-16) ことから、Facebook ページを通じた情報の拡散は効果があると考えられる。

応募学生の学年傾向を見ると (P.22)、参加学生数は 4~5 年生が多い傾向ではあるが、3 年生以下の参加者も見られることから、VPcamp の情報が低学年層にも伝わっていることが確認できる。

しかしながら、アンケート調査によると、学生の VPcamp 認知度は「25%くらいが知っている」から「75%くらいが知っている」まで幅広かったことから、来年度以降も引き続き、学生向け手引き (VPcamp Book) やチラシ等を使った更なる情報周知を行う必要がある。

4) 学生の進路追跡調査の必要性

獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議（平成 23 年度～）（第 15 回）配付資料によると、平成 24 年度に卒業した獣医学生約 2 割が公務員獣医師となった（P. 40）。この結果と VPcamp 参加学生の進路を比較すると、VPcamp 参加学生の方が公務員獣医師を選択する割合が高いといえる。

今年度行った進路追跡調査では、就職先を公務員獣医師・独立行政法人・民間企業という大きなくくりで調査を行ったが、平成 28 年度は公務員獣医師については公衆衛生分野と農林畜産分野別のデータを収集するとともに、VPcamp 参加者に占める実際に公務員獣医師となった学生の割合と非参加者に占める割合の比較分析を行うことで、本事業の効果を調査したい。

5) サステナビリティの必要性

平成 27 年度は、ホームページを活用した実習プログラムの周知・募集・応募およびアンケートの収集を行ってきた。ホームページは wordpress を用いて作成しているが、その更新作業に関して、より省力的に作業を行えるように改善を図り、委託事業の終了後も、全国的な実習システムとして継続できるように整備する必要がある。